



Title	認知・機能言語学研究 X（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2025, 2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102191
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト2024

認知・機能言語学研究 X

小	薬	哲	哉
孫		聴	雨
王			鉦

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2025

言語文化共同研究プロジェクト 2024

認知・機能言語学研究 X

目次

小葉哲哉 プロジェクトの目的と活動.....	1
孫 聰雨 使役受身構文の意味と形式—BCCWJに基づく記述的分析—.....	4
王 鈺 中国語の“V 掉”、“V 下”の意味・機能とその拡張の動機づけ.....	24
小葉哲哉 英語の軽動詞構文研究の進展と課題（1）.....	43

言語文化共同研究プロジェクト「認知・機能言語学研究 X」の目的と活動

小栗 哲哉

本報告書は、大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻の 2024 年度言語文化共同研究プロジェクト「認知・機能言語学研究 X」の成果をまとめたものである。本プロジェクトでは、認知言語学及び機能主義言語学という理論的枠組みに基づいて研究をしている教員・院生を中心に、個別言語の現象分析から様々な言語事象の理論的意義について考察、交流することを目的としている。理論と実践とが乖離することなく互いにフィードバックし合う研究を目指しており、また、同じ方向性を共有した研究を行っている本専攻にゆかりのある研究者にも参加いただき、各氏が専門とする研究アプローチ・理論的枠組みから意見交換を行うことで、最新の研究動向の把握とともに、研究活動のさらなる活発化を図っている。

本プロジェクトは、2015 年に当時の言語文化研究科専任教員であった早瀬尚子先生、田村幸誠先生、筆者の 3 名により「認知・機能言語学研究 I」としてスタートしたプロジェクトを引き継いだものである。すなわち、開始からちょうど 10 年目を迎えたのである。開始当初は、研究における興味関心の共有を目的とした研究会を不定期で行っていたが、その後、当時の大学院博士後期課程の院生によって発足した「大阪認知言語学研究会」と本プロジェクトの研究会が合流し、それから大学院生の研究分担者の加入やリサーチ・アシスタント（RA）の配置、2019 年からの新型コロナウイルス感染症の流行に伴う全面オンライン化などを経て、現在のオンラインによる定例研究会と年 1 回の対面研究会という形式に落ち着いた。

オンライン研究会は、コロナ禍で加速したデジタル化の影響を受けて開始されたが、最初は Zoom でのリアルタイムオンライン会議のみだったものが、最終的に発表動画の事前配信、Google スプレッドシートへの質問・コメントの集約、Zoom でのリアルタイム意見交換会という現在の形式に発展していった。ここ数年（特に人文学研究科統合以降）、海外からの留学生が多く在籍していることもあり、日本語にまだ不慣れな方にとっては、動画配信であれば発表を見直すことができ、助かっているというご意見もいただいている。スプレッドシートでの事前質問の記入も、コロナ禍での学会のオンライン大会を参考にしたものであるが、これには参加者からの質問に対して返答

を事前に考えることができるという利点がある。質問の事前記入を導入して以降、会当日のディスカッションが濃密なものになったと感じている。また、当日参加できない方からも意見やコメントをいただくことができるという点も長所であり、学会発表や修士論文、博士論文の準備として発表いただく方にとって、貴重なご意見やアドバイスを参加者から漏れなく記録し、今後の参考にできるようなシステムとなっている。

一方で、年数回程度の対面開催についても、その後に懇親会を開催して親交を深めている。かつては院生だった方々も、今では国内外で大学教員として活躍されている方も少なくない。そのような状況を見ると、10年という月日の長さ、そして短さを感じて大変感慨深い。

10年の間に多くの貴重な出会いがあった。現在では様々な分野の方々にご参加いただいている。プロジェクト「認知・機能言語学研究」をこのように続けてこられたのも、プロジェクトメンバーとして参加してくださった方々、学内外から研究会に足を運んでくださっている方々のおかげである。皆様に、深く感謝申し上げます。また、博士論文執筆の忙しい時期に、本プロジェクト 2024 年度 RA として支えてくださった王鈺氏にも心より御礼申し上げます。

「認知・機能言語学研究 X」構成メンバー

研究代表者

小藁 哲哉	大阪大学大学院人文学研究科	准教授
-------	---------------	-----

研究分担者

高橋 克欣	大阪大学大学院人文学研究科	准教授
山田 彬堯	大阪大学大学院人文学研究科	准教授
中畠 浩貴	大阪大学大学院人文学研究科	准教授
瀬戸 義隆	大阪大学マルチリンガル教育センター	特任助教
田尾 俊輔	大阪大学学際大学院機構	助教
早瀬 尚子	龍谷大学	教授
坂場 大道	立命館大学	外国語嘱託講師

大井 良友	大阪大学大学院言語文化研究科	課程博士論文申請資格者
梶原 久梨子	大阪大学大学院言語文化研究科	博士後期課程
蘇 暁笛	大阪大学大学院言語文化研究科	博士後期課程
王 鈺	大阪大学大学院人文学研究科	博士後期課程
小林 拓海	大阪大学大学院人文学研究科	博士後期課程
孫 聰雨	大阪大学大学院人文学研究科	博士後期課程

(2024 年 4 月 1 日時点)

使役受身構文の意味と形式

—BCCWJ に基づく記述的分析—

孫 聰雨

キーワード：使役受身、(さ) せられる／(さ) される、コーパス分析

1 はじめに

日本語の「(さ) せられる／(さ) される」のような使役受身表現は、一般的に使役の表現「(さ) せる／(さ) す」に受身の表現「(ら) れる」が付加し、そこから派生した表現だと認識されている。この表現の呼称については研究者によって異なり、松下 (1977) は「使動の被動」、村上 (1986) は「使役のうけみ」、前田 (1989) は「使役受動態」と呼んでいる。本稿では、この「使役受身」という用語に統一して論を進めることとする。使役受身構文の意味用法は従来、以下のように規定されている。

(1) 使役受身の「強制」意味と「誘発」意味¹ (日本語記述文法研究会 2009)

- a. 「強制」：意志動詞から作られ、被使役者が自分の意志に反して他者によって事態の実行を「強制」されることを表す。
- b. 「誘発」：感情や思考を表す動詞から作られ、二格の名詞やテ形の表す内容が原因となって、その感情や思考が生じたことを表す。

(2) 私は母に嫌いなものを食べさせられた。 [強制]

(3) 世の中の変化の激しさにはまったくびっくりさせられるよ。 [誘発]

(日本語記述文法研究会 2009: 248)

¹ 日本語記述文法研究会 (2009) では、使役受身の2つの用法に対して「強制」「誘発」という名称を使用していないが、便宜上、ここでは「強制」「誘発」と呼ぶ。

しかしながら、こうした分類や説明では捉えきれない用法の存在も確認される。たとえば、「強制」は「意志動詞から作られる」とされているが、実際には以下のように無意志動詞を用いた使役受身文も『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』において確認される。

- (4) テーブルも乱暴に動かされたらしく、一台はひっくり返っている。

(『スピリット・リング』, BCCWJ, PB19_00101²)

- (5) ヴァイマル時代に過激な政党（ナチス政党）により共和体制が崩壊させられた。

(『EU と現代ドイツ』, BCCWJ, LBr3_00059)

これらの例においては、被使役主が人間や意志を持つ主体ではなく、無情物である。つまり、(1)の規定における「被使役者の意志」や「感情・思考」といった意味の前提が成り立たないにもかかわらず、使役受身表現が自然に用いられている。このことから、「強制」や「誘発」という従来の二分法では把握しきれない、より広範で柔軟な意味機能が使役受身表現には含まれていることが示唆される。

また、形態的な観点からも興味深い現象が観察される。たとえば、(4) の「動かされた」は和語「動く」を本動詞とする使役受身表現であるが、この場合、本来理論的には「動かせられる」と「動かされる³」の2つの形式が想定される。しかし、BCCWJにおける「動く」の使役受身表現の296例すべてにおいて、「動かされる」形式が用いられており、「動かせられる」という使役受身形式の出現は確認されなかった。これは、使役表現における「(さ) せる」と「(さ) す」という語彙的選択に、使用上の偏りが存在する可能性を示唆している。

² BCCWJ から収集した例文はこのように、最後のところにサンプル ID を示す。

³ 本稿では、「動かされる」という形式を、「動く」という自動詞に「(さ) す」形の使役が加わったものとして解釈し、使役受身表現に含めて扱う。ただし、この形式については「動かす」という他動詞の単純受身とみなす立場もありえると考えられる。本稿では、形態的観点から、「(さ) される」形をとる表現をすべて使役受身の一つとみなし、その根拠は5.2節で詳述する。

以上のように、日本語の使役受身表現に関しては、これまで「強制」や「誘発」といった意味の類型化を通じた分析はなされてきたものの、語彙的・形態的な側面と意味機能において、体系的かつ包括的な記述は十分に蓄積されているとは言い難い。特に、動詞との生起実態や被使役主の有情性、「(さ) される」と「(さ) せられる」の使用傾向といった点に関しては、体系的な視点からの記述が今後の課題として残されている。

2 先行研究および研究課題

本章では、まず使役受身に関する先行研究を概観する。本稿では、使役受身に関する研究を、①意味用法の分類に関する研究と、②使役受身の適格性条件に関する研究の二つに大別する。2.1 節では意味用法の分類に関する研究を、2.2 節では適格性に関する研究を紹介し、最後の 2.3 節において、先行研究の知見を整理した上で、本稿の課題を提示する。

2.1 意味用法に関する先行研究

使役受身の意味用法に関しては、前田 (1989) 、小嶋 (1998) 、日本語記述文法研究会 (2009) による研究がある。

前田 (1989) は、「被役」と「誘発」という用語を用い、使役受身の用法を二つに分類して詳細な分析を行っている。まず「被役」用法については、(6)のような規定を設け、(7)のような具体例を提示している。この用法では、「強制」による不本意さや迷惑感が被使役者に生じることが特徴とされる。ただし、前田はこれに当てはまらない「中立的な意味」をもつ用例(8)も指摘し、これは「文脈上、迷惑感が抜けている」ことに起因するとしている。また、主語が人間以外の場合の(9)の存在も言及している。

- (6) 意志的動作を表す動詞によって作られる「被役」用法：

「A が C に V-(s)-ase-rare-ru」で A の動作 V は何らかの「強制」を受けたものであり、そのため、A にとって不本意なもの・嫌なものという気持ち、あるいは「強制」されたことによる「迷惑」感が表される。

- (7) 宮田が電子音楽によって精神を惑乱させられた。

- (8) こうして、お召列車の三つのタブーは、世界一の列車ダイヤづくりの職人達によって見事に完成させられる。

- (9) 自分の暗殺によって、歴史が逆戻りさせられることはない。

(前田 1989: 25-28)

次に「誘発」用法については、感情・心理・知的活動に関する動詞によって構成されるとし、(10)のような規定と(11)のような例を示している。

- (10) 感情や心理・生理状態を表す動詞と知的活動を表す動詞によって作られる「誘発」用法：

強い感情をある原因によって避けようもなく呼び起こされたことを表す。

- (11) 本例の場合もそうなのだが、そんなときには、子供の成長する力の強さに驚嘆させられる。

(前田 1989: 26)

このように、前田 (1989) は使役受身の「被役」用法と「誘発」用法を区別しつつ、「中立的」用法や非人間主語の例にも着目しているが、どのような動詞との組み合わせでどの用法になるかといった体系的な分析は明示されていない。

小嶋 (1998) は、使役受身の用法を「強制」「不本意」「誘発」の三つに分類している。分類基準としては、動詞の意味に加えて、動作主と使役主体の性質も考慮されている。

- (12) 使役受身の意味 3 分類

- a. 強制「人(動作主)が人(使役主体)に～させられる(意志動詞)」
- b. 不本意「人(動作主)がもの・こと(使役主体)に～させられる(意志動詞)」
- c. 誘発「人(動作主)がもの・こと(使役主体)に～させられる(無意志動詞)」

(小嶋 1998: 168)

各用法の具体例として、以下が示されている。

- (13) 結局みどりに出席する約束をさせられてしまった。 [強制] (小嶋 1998: 150)

- (14) 「つめたいなあ」足から身内にあがってくる冷気に、自然に三人は言わせられるのであった。 [不本意] (小嶋 1998: 159)

- (15) 弟が素直できょうだい仲のいいとき、姉というものは寂しいものという感じを味わせられた。 [誘発] (小嶋 1998: 163)

この三分法は動詞の種類だけでなく、使役主と被使役主の有情性の違いにも注目している点で有意義である。しかし、「強制」と「不本意」の違いは必ずしも明確でなく、いずれも被使役主にとって望ましくない事態を表すため、分類の妥当性については検討の余地がある。

最後に、日本語記述文法研究会 (2009) では、使役受身文を二用法で区別し、それぞれを以下のように定義している。

(16) a. 意味 1 :

意志動詞から作られ、被使役者が自分の意志に反して他者によって事態の実行を強制されることを表す。 [=強制]

b. 意味 2 :

感情や思考を表す動詞から作られ、二格の名詞やテ形の表す内容が原因となって、その感情や思考が生じたことを表す。 [=誘発]

(16a)が本稿の「強制」用法に、(16b)が「誘発」用法に該当する。それぞれの例として、以下が挙げられている。

- (17) 私は親友の結婚式で大勢の人の前でスピーチさせられた。

- (18) 私はこのところずっと頭痛に悩まされている。

(日本語記述文法研究会 2009: 248,251)

「誘発」用法では、対応する能動文と近い意味になるが、使役受身文では原因と結果の関係に叙述の焦点が置かれるとされている。

以上より、各研究は使役受身の意味用法に関してそれぞれ異なる視点を提供しているが、分類の基準や網羅性において一定の課題を残している。

2.2 適格性に関する先行研究

使役受身文がどのような条件下で適格とされるかに関しては、影山 (1993) と高見・久野 (2006) による分析がある。

影山 (1993) では、動詞の非対格性・非能格性が使役受身文の適格性に影響があると述べている。

- (19) a. 二人を離婚させる。／子供をジャンプさせた。 [非能格動詞]
b. 二人は離婚させられた／子供がジャンプさせられた。 [非能格動詞]
(20) a. 水を蒸発させた。／花を咲かせる。 [非対格動詞]
b. *水が蒸発させられた。／*花が咲かされた。 [非対格動詞]
(影山 1993: 61)

影山 (1993: 61) では、(19)の「離婚する」「ジャンプする」のような非能格動詞から作られる使役受身文が容認されると主張されている。非能格動詞の主語は他動詞の主語と同じく、動作主の機能を果たし、動作主としての主語は使役受身文の主語にもなれるためだと説明されている。一方、(20)のような非対格動詞において、主語は実質的に他動詞の目的語と同じ機能を果たし、非対格動詞から作られる使役受身文は不適格と述べられている。

しかし、高見・久野 (2006) はこれに反論し、非対格動詞を用いた使役受身文の容認例を提示している。

- (21) 社員たちは、社長の突然の辞意に驚かされた。
(22) 人工照明で花が早く咲かされても、そんな花はあまり長持ちしませんよ
(高見・久野 2006: 221)

高見・久野 (2006) は使役主の重要性を取り上げ、意味の「直接性」を用いて、使役受身が適格となる条件として(23)のように規定している。

- (23) 使役受身文に課される意味的・機能的制約
使役受身文は、当該の使役事態を引き起こす直接的要因になっており、被使役主(主語指示物)がその使役事象の直接的対象になっている場合にのみ、適格となる。
(高見・久野 2006: 226)

この使役主を重視した制約で、従来容認が困難とされていた例が説明可能になる。例えば、(20b)の「花が咲かされた」という文だけでは容認されにくいだが、被使役主の役割を明示する(22)に言い換えると、容認度が高くなると分析されている。高見・久野 (2006) の直接性制約は、説得力が高く、本稿に大きな示唆を与えた。

2.3 まとめと本論の研究課題

以上の議論を踏まえると、先行研究における主要な知見は次のとおりである。

(24) a. 使役受身文の用法

使役受身文は、「誘発」と「強制」の2つ用法に大まかに分かれる。

b. 動詞の語彙意味的条件

「誘発」用法の使役受身文に生起する動詞は思考動詞・感情動詞である。「強制」用法の使役受身文に生起する動詞は基本的に意志動詞である。ただし、無意志動詞であっても、使役主の役割を明示に強調する場合は使役受身文に生起可能である (高見・久野 2006)。

これらの先行研究はそれぞれに有用な知見を提供しているが、体系的・包括的な分析には至っていない。本稿では、これらの知見を踏まえつつ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』のデータに基づき、日本語の使役受身構文について以下の三点から体系的記述を試みる。

- ① 使役受身表現として実際に用いられている動詞の種類とその特徴
- ② 被使役主および使役主の有情性とその文法的振る舞い
- ③ 「(さ) せられる」と「(さ) される」の形態的・意味的選好傾向

本稿を通じて、従来断片的に扱われてきた使役受身表現の意味機能と形態の関係性を整理し、日本語文法における体系的理解の一端を明らかにすることを目指す。

3 使役受身文構文における動詞使用の実態調査 (BCCWJ)

3.1 例文の検索方法

本稿では、BCCWJ における短単位検索を用いて、「(さ) せられる」と「(さ) される」の2形式を区別して検索した。これは、語種によって生じやすい形式に傾向が見られるためである。一般に、「(さ) される」は和語にのみ現れ、「(さ) せられる」は和語・漢語の両方に現れる。このような形態的傾向を踏まえ、検索式を以下のように設定した。

(25) 使役受身表現の検索式 (BCCWJ)

a. (さ) される形

キー: (品詞 LIKE "動詞-一般%" AND 活用型="五段-サ行" AND 活用形="未然形-一般")

AND 後方共起: (語彙素="れる" AND 品詞 LIKE "助動詞%") ON 1 WORDS
FROM キー

b. 漢語+ (さ) せられる形

キー: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "未然形%")

AND 後方共起: (語彙素="させる" AND 品詞 LIKE "助動詞%" AND 活用形 LIKE "未然形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="られる" AND 品詞 LIKE "助動詞%") ON 2 WORDS
FROM キー

c. 和語+ (さ) せられる形

キー: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "未然形%")

AND 後方共起: (語彙素="させる" AND 品詞 LIKE "助動詞%" AND 活用形 LIKE "未然形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="られる" AND 品詞 LIKE "助動詞%") ON 2 WORDS
FROM キー

上記の条件に基づいて得られた用例から、使役可能文や受身文、尊敬表現などの類似形式を手作業で除外した。今回、最終的に得られた使役受身文の用例数は、合計 13,040 例である。

3.2 使役受身文における動詞使用の実態

使役受身文において高頻度⁴で使用される動詞を以下に示す。(さ)せられる形をとる動詞については表1に、(さ)される形をとる動詞については表2にまとめた。

和語＋(さ)せられる形			漢語＋(さ)せられる形					
順位	語彙素	用例数	順位	語彙素	用例数	順位	語彙素	用例数
1	考える	257 例	1	感心する	63 例	16	発展する	14 例
2	感じる	89 例	2	痛感する	45 例	17	変化する	14 例
3	止める	75 例	3	納得する	36 例	18	直面する	13 例
4	食べる	48 例	4	認識する	34 例	19	解散する	13 例
5	思う	23 例	5	移住する	27 例	20	約束する	12 例
6	受ける	21 例	6	実感する	26 例	21	参加する	12 例
7	聞く	21 例	7	従事する	20 例	22	勉強する	10 例
8	嘗める	17 例	8	満足する	18 例	23	従属する	10 例
9	覚える	14 例	9	入院する	18 例	24	結婚する	10 例
10	見る	13 例	10	反省する	17 例	25	加入する	10 例
11	座る	13 例	11	びっくりする	17 例			
12	飲む	12 例	12	意識する	15 例			
13	行く	10 例	13	感動する	15 例			
14	負う	10 例	14	移動する	14 例			
15	変える	10 例	15	苦勞する	14 例			

表1 (さ)せられる形をとる高頻度の動詞一覧表

⁴ 本稿において、粗頻度 10 以上の動詞を表にして高頻度として扱っている。

和語＋（さ）される形								
順位	語彙素	用例数	順位	語彙素	用例数	順位	語彙素	用例数
1	聞く	1052 例	31	働く	73 例	61	揺り動く	20 例
2	知る	618 例	32	煩う	69 例	62	支払う	20 例
3	悩む	614 例	33	取る	68 例	63	味わう	20 例
4	驚く	434 例	34	買う	67 例	64	投げ飛ぶ	20 例
5	立つ	341 例	35	書く	67 例	65	重ね合う	19 例
6	待つ	319 例	36	座る	67 例	66	引き剥ぐ	18 例
7	思い知る	307 例	37	浮く	66 例	67	思い込む	17 例
8	動く	296 例	38	付き合う	63 例	68	走る	17 例
9	惑う	240 例	39	背負う	63 例	69	蹴散る	16 例
10	飛ぶ	237 例	40	突き飛ぶ	57 例	70	狂う	16 例
11	吹き飛ぶ	233 例	41	行く	56 例	71	手伝う	15 例
12	励む	203 例	42	脱ぐ	53 例	72	迷う	14 例
13	済む	190 例	43	巡る	50 例	73	抜く	14 例
14	張り巡る	179 例	44	払う	46 例	74	散る	13 例
15	遣る	175 例	45	凝る	46 例	75	会う	13 例
16	気付く	163 例	46	合う	45 例	76	悟る	13 例
17	組み合う	152 例	47	蹴飛ぶ	41 例	77	開く	12 例
18	飲む	136 例	48	掴む	40 例	78	使う	12 例
19	負う	134 例	49	鳴る	40 例	79	売り飛ぶ	12 例
20	減る	112 例	50	弾き飛ぶ	38 例	80	打っ飛ぶ	11 例
21	遭う	105 例	51	跳ね飛ぶ	37 例	81	縫い合う	11 例
22	剥ぐ	98 例	52	読む	35 例	82	呼び習う	11 例
23	躍る	97 例	53	戦う	33 例	83	信じ込む	11 例
24	泣く	88 例	54	歩く	30 例	84	笑い飛ぶ	11 例
25	持つ	87 例	55	噛む	27 例	85	歌う	11 例
26	食う	87 例	56	撒き散る	26 例	86	組む	10 例
27	研ぎ澄む	86 例	57	担う	24 例	87	曇る	10 例
28	遣う	79 例	58	言う	23 例			
29	利く	75 例	59	打ち鳴る	22 例			
30	突き動く	74 例	60	引き合う	21 例			

表2 （さ）される形をとる高頻度の動詞一覧表

3.3 観察

3.2 節の結果から、使役受身表現において高頻度で使われる動詞は、基本的に意志動詞であることがわかる。これは先行研究の知見とも一致する。一方、表 1、表 2 では頻度が低いと明示されていないが、以下のような無意志動詞の用例も BCCWJ から確認できた。

- (26) スキー板が弧を描く場面で重心位置が谷側に動かされていることがわかります。
(『月刊 SKI JOURNAL』, BCCWJ, PM21_01409)
- (27) 定義を不明確にしたままの女性性の賞讃は、女性ならば誰でもが、人間への関心、感受性、集团的論理をもっている、当然もたなくてはならない、というように、義務と規範にまで強化させられはしないか。
(『ドイツ二つの過去』, BCCWJ, LBm3_00166)
- (28) (言語の) この拡張により、他の言語は消滅させられたり、駆逐されたり、あるいは吸収されたりする。
(『消えゆく言語たち』, BCCWJ, LBp8_00008)

これらの無意志動詞は、語彙的に対応する他動詞をもたない無対自動詞⁵であり、「(さ)す」あるいは「(さ)せる」という文法的使役を介して使役受身形が可能になる。これに対し、次の(29)、(30)のような有対自動詞を使役受身化した文は、一般に非文と認識される。語彙的使役(例:「集められる」「温められる」)と文法的使役(例:「集まらされる」「温まらされる」)が競合する場合、原則として語彙的使役が優先される。そのため、有対自動詞をもとにした使役受身文は容認されにくい。この点は、寺村 (1982)、野田 (1991) が指摘する使役構文における制約と整合できる。

- (29) * 小物が子供に集まらされた。 (作例)

⁵ 奥津 (1967) を参考に、対となる動詞を「[アク]」「[アケル]」の様に、ある種の意義的同一性を保ちながら、自動詞と他動詞と別れている動詞」と規定する。無対自動詞はすなわち対応する他動詞を持たない自動詞を指す。ただし、本稿では「(さ)す」語彙素を語彙的なヴォイスではなく、文法的なヴォイスの使役として扱う。5.2 節で根拠を詳述する。

(30) * みそ汁が夫に温まらされた。 (作例)

また、「誘発」用法に関しては、従来より思考・感情を表す動詞が用いられるとされてきた。表 1、表 2 における感情・思考動詞の分布を観察すると、感情自動詞については以下のような用例が確認された。

(31) エッフェル塔では東京のラッシュアワーのような人ごみに驚かされ、凱旋門では車の洪水にびっくりさせられます。

(『頭にやさしい雑学読本』, BCCWJ, LBf4_00004)

(32) たとえば、道行く人にかける言葉にしても、ずいぶん感心させられた。

(『届かなかった贈り物』, BCCWJ, PB59_00488)

しかし、感情動詞のうち、「愛させられる」「憎まされる」「羨まされる」などの感情他動詞を用いた使役受身表現は、BCCWJ では確認されなかった。

以上、本章では、BCCWJ を用いたデータ収集と観察を通じて、使役受身構文における動詞の使用傾向を検証した。「強制」用法においては、意志動詞が使われやすいという先行研究の知見が、本調査によっても裏付けられた。また、無意志動詞を用いた使役受身文が一定数存在することが確認され、それらは基本的に無対自動詞に限定されることも明らかになった。さらに、「誘発」用法における感情動詞の使用傾向として、感情自動詞は使役受身化が可能である一方、感情他動詞は使役受身形では用いられにくいことが分かった。

4 使役主、被使役主の有情性における考察

第 3 章では、使役受身表現における動詞の使用実態について分析を行った。続く本章では、使役受身文における使役主および被使役主の有情性に注目し、それぞれの性質と文中での振る舞いについて記述していく。特に、有情物か無情物かという点が、意味解釈や構文の分類にどのような影響を与えるかを中心に考察を進める。

4.1 使役主の有情性

BCCWJ から収集した使役受身文の用例を観察した結果、使役主として現れる要素は大きく分けて「有情物」と「コト（無情）」の2種類に分類できることが分かった。有情物が使役主となる場合、その多くは意図的な働きかけを伴っており、意味的には「強制」のニュアンスが強くなる傾向がある。以下に示す用例はいずれも、意図を持った有情物による働きかけによって、被使役主が本意に反する行為を強いられていることが読み取れる。

(33) 父が劇団を作って公演に回っていたので、私は四歳の時、舞台に立たされたことがあるんです。
(『週刊文春』, BCCWJ, PM31_00214)

(34) 幼稚園を母親によってやめさせられた俊君は、せっかくの自立のチャンスを母親によって断ち切られてしまいました。

(『ちゃんと「自分でできる子」に』, BCCWJ, LBq3_00104)

(35) 本人の全く知らぬ間に精神病であるというレッテルをつけられ、警察、保健所によって強制的にE病院に入院させられました。

(『精神保健福祉論』, BCCWJ, PB53_00428)

一方、使役主が「コト」などの無情物である場合、それはしばしば状況や出来事といった要素であり、そこから生じる影響によって被使役主の感情や思考が引き起こされるという構図が見られる。このような場合、使役行為は意図的ではなく、むしろ出来事が「誘因」となって、結果的に使役的な状況が生じたと解釈される。以下の例に見られるように、被使役主の心理的・行動的变化が、非意図的に引き起こされる様子が示されている。

(36) ねっしんな町会長さんのたのみにうごかされたわたしは、つぎの日の朝早く、その町へでかけていった。
(『お父さんは鳥のように』, BCCWJ, LBcn_00025)

(37) 民社党の塚本委員長が秘書を通じて多額の儲けをしていたことなどをみると、なるほどと思わされます。
(『巨悪 vs 言論』, BCCWJ, LBh3_00106)

- (38) まったく医学的根拠のない迷信だけが残されて、無意味な悩みに苦しめられるようになってしまった。
(『十五歳の自分探し』, BCCWJ, PB23_00191)

このように、使役主が有情物であるかコトであるかによって、使役の意味合いや使役受身文全体の解釈に大きな違いが生じることが明らかとなった。

4.2 被使役主の有情性

使役受身文における被使役主、すなわち主語となる要素についても、有情性に注目すると興味深い傾向が見られる。従来の研究では、使役受身構文における典型的な用法として、「強制」と「誘発」の2つが挙げられている。「強制」用法では、他者の意図的な働きかけによって、被使役主が自分の意志に反して行為を実行させられる。一方、「誘発」用法では、感情や思考といった内的変化が、自然に引き起こされる点が特徴である。いずれの用法においても、被使役主は基本的に意志や感情を持つ有情物であることが前提とされている。

しかし、実際の用例には、無情物が被使役主として用いられている例も確認できる。以下に挙げる例は、非典型的な使役受身構文として注目に値する。

- (39) 痛さを感じる神経は麻痺させられていても、内臓の痛みに耐えているのでしょう。
(『わが性と生』, BCCWJ, OB3X_00243)
- (40) 染め上がった革は、周りの壁に張って乾かされる。
(『シュ克蘭!』, BCCWJ, PB12_00124)
- (41) 霧雨で街灯が曇らされ、歩道をつややかに照らしている。
(『飛蝗の農場』, BCCWJ, PB29_00590)

これらの例では、被使役主が有情性を持たないにもかかわらず、「(さ) せられる」あるいは「(さ) される」という使役受身の形が用いられている点が特徴的である。これらの文は、単純に「強制」あるいは「誘発」として分類することが困難だが、共通点として、被

使役主が外部からの作用によって強制的に変化を被っている点に注目すべきである。この意味で、無情物主語の使役受身文も、広義の「強制」的な意味を持つと捉えられる。

以上を踏まえ、本稿では従来の「強制」用法の枠組みを拡張し、無情物主語の文も含めて以下のように規定する。

(42) 使役受身構文の「強制」意味

使役主の意図的な働きかけによって、被使役主が変化を強制的に被ることを表す。典型的な場合、被使役主が不本意である。

以上のように、本章では使役受身構文における使役主および被使役主の有情性に注目し、それぞれの特徴と用法の違いについて考察した。とりわけ、無情物が被使役主となる用例を含めて、「強制」意味をより広く捉える視点を提示した点が本章の特徴である。これは従来の研究の枠組みを補完・拡張するものとして考えられる。

5 「(さ) せられる」と「(さ) される」形式における考察

ここまで使役受身構文における動詞、使役主、被使役主の振る舞いを概観してきた。本章では、使役受身文の形態的特徴、すなわち「(さ) される」と「(さ) せられる」の両形式を対象に分析する。5.1 節では両形式の意味的な違いや使用傾向を整理し、5.2 節では両形式を共に使役受身として扱う立場の根拠を述べる。

5.1 「(さ) される」と「(さ) せられる」の使い分け

3.1 節でも述べたように、BCCWJにおける用例では、「(さ) される」は和語動詞のみに現れ、「(さ) せられる」は和語・漢語の両方に出現する傾向がある。漢語では「(さ) せられる」のみが使用されるため、本節では和語に限定して両形式を比較する。

まず多くの和語動詞において、「(さ) される」と「(さ) せられる」は意味的にも帰納的にもほぼ同等で、置き換えが可能である。たとえば「立つ」に関する以下の例では、どちらの形式も使用されており、意味や文脈上の差異はほとんどない。

(43) a. 祭りばやしに合わせて、おどり衆が列になっておどる、その先頭に四郎は立たされたのだ。
(『福の神になった少年』, BCCWJ, LBln_00035)

b. きまりきった町長の弔辞、訳の分らない坊さんのお経、一時間も二時間もお寺の庭に立たせられたものでした。(『青鞥』女性解放論集』, BCCWJ, LBf3_00087)

(44) a. なにも悪いことをしていない日本が、たいへんな苦境に立たされている。
(『東京は 60 秒で崩壊する!』, BCCWJ, LBf3_00022)

b. 一つは、やはり下請企業が大変今苦境に立たせられておるというのが現況でございます。
(『国会会議録』, BCCWJ, OM65_00002)

一方、優先傾向がみられる場合もある。五段動詞や「す」で終わる一段動詞では、「(さ) される」形式にすると音韻的に「さ」が連続するため好まれず、「(さ) せられる」の使用が圧倒的に多い。たとえば「食べる」に関しては、(45)の「食べさせられる」形式は BCCWJ に 48 例もみられるのに対して、(46)の「食べさされる」形式は 1 例しか確認できず、ごく稀である。

(45) 頭取さんが食べられない分（茶碗半杯分）も食べさせられましたがね（笑）
(「Yahoo! ブログ」, BCCWJ, OY11_03479)

(46) しかも、最後まで残されて食べさせられる。
(『みんなのなやみ』, BCCWJ, PB41_00234)

また、無情物主語で物理的な状態変化を表す文脈では、「(さ) される」が優先される傾向がある。以下の例においては、BCCWJ に「(さ) せられる」の形は確認できない。

- (47) 死斑は見られないから、ほかの場所で殺害され、二、三時間以内に（死体が）動かされたものと考えられる。 (『刹那の囁き』, BCCWJ, PB39_00223)
- (48) 樹林帯を越えると、雪が飛ばされて凍った地面が出ている斜面が延々と続く。 (『風の地平』, BCCWJ, PB39_00440)
- (49) 目の前に広がる海は真っ暗で、波の音はたえまなく鳴らされる太鼓に似ていた。 (『キッドナップ・ツアー』, BCCWJ, PB39_00023)

このように、物理的移動や状態変化を伴う動詞（「動く」「飛ぶ」「鳴る」など）では、「(さ) される」形がより好まれる傾向がある。ただし、こうした傾向が他の動詞にも当てはまるかどうかは、さらなる調査が必要である。

5.2 「(さ) される」を使役受身表現とする立場

(47)の「動かされる」、(49)の「鳴らされる」の例では、形式的には「動かす」「鳴らす」という他動詞の受身と捉えることもできる。しかし、本稿はこれらも使役受身表現と見なす立場を取る。理由は以下の通りである。

第一に、「(さ) す」語彙素の生産性が高く、多くの自動詞に結合して新たな他動詞を形成できる点が挙げられる。これに対し、「開く—開ける」「温まる—温める」などの語彙的対応は限定的で、非生産的である。したがって、「(さ) す」は語彙的よりも文法的なヴォイス、すなわち使役として扱うのが妥当だと考える。

第二に、「(さ) される」と「(さ) せられる」は機能的・意味的に大差なく、多くの文脈で相互に置換可能である点が挙げられる。

第三に、影山 (1993) や高見・久野 (2006) といった先行研究も、両形式を区別せず使役受身表現として扱っている。したがって、本稿は「(さ) される」も使役受身表現の一部として捉える立場をとる。

ただし、本稿は「(さ)す」語彙素の文法化にも段階があることを認める。「動かされる」「鳴らされる」のように、「(さ)す」が動詞と一体化し、使役的意味が希薄になっている用法も存在する一方で、「立たされる」「入らされる」などは、明確な使役的意味を保持している。

6 結論

本稿は、日本語の使役受身表現「(さ)せられる」「(さ)される」に注目し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』に基づいて、その意味機能および形態の実態を記述的に分析した。従来の研究では、「強制」「誘発」といった意味用法の分類や、動詞の語彙的制約、構文の適格性に関心が払われてきたが、実際の用例を体系的に調査し、形態・意味・使用傾向の全体像を捉えようとする試みは多くない。本研究は、以下の三点に焦点を当て、使役受身表現の体系的な記述を目指した。

第一に、動詞との生起傾向に関しては、従来通り、使役受身文が基本的に意志動詞を中心に形成されるという先行研究の知見が、13,000 例以上の用例分析によって再確認された。一方で、無意志動詞との結合も一定数確認され、特に語彙的に対応する他動詞を持たない無対自動詞での使役受身化が自然に成立していることが示された。これに対し、語彙的使役をもつ有対自動詞からの使役受身化は非文とされる傾向が強く、語彙的使役と文法的使役の相互作用に制約が存在することが明らかになった。

第二に、使役主および被使役主の有情性に関する観察から、使役受身構文においては、有情物を主語とする典型的な「強制」「誘発」用法に加え、無情物が主語となる非典型的な用例も自然に生起していることがわかった。これらは従来の分類には収まりきらないが、いずれも「外部からの働きかけにより変化を受ける」という点において共通しており、本稿ではこうした無情物主語の用法を広義の「強制」用法と位置づけた。これにより、「強制」概念の意味範囲が拡張され、構文の多様性に柔軟に対応する分析枠組みが提案された。

第三に、形態の観点からは、「(さ)される」と「(さ)せられる」という二形式の使い分けにおいて、語種や音韻的制約、意味的要因が関与していることが確認された。特に、「食

べさされる」など「さ」の連続を含む形式は使用頻度が極端に低く、音韻的要因によって「(さ)せられる」への集中が生じている。また、無情物主語＋物理的変化動詞の文脈では「(さ)される」形が好まれる傾向も観察され、意味と形式の対応関係において新たな知見が得られた。

以上の分析を通じて、使役受身表現は意味・形態ともに多様性を持ちつつも、明確な使用傾向と構造的制約のもとに成立していることが明らかとなった。従来の「強制」・「誘発」という二項対立的な枠組みを超え、構文の柔軟性と体系性を両立させる記述的枠組みが必要であることを示唆している。

今回は動詞の使用実態に注目したが、今後は被使役主、使役主の性質もデータに基づいて分析する必要がある。特に、無情物主語＋物理的変化動詞の文脈で「(さ)される」形が好まれるという傾向は観察的な指摘にとどまっており、今後はその実態を定量的に検証していきたい。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形―自・他動詞対応―」『国語学』 70: 46-66.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 東京：ひつじ書房.
- 小嶋栄子 (1998) 『現代日本語のうけみ文の研究―その意味と機能及び文学作品における使用について』 大東文化大学博士学位論文.
- 高見健一・久野暲 (2006) 『日本語機能的構文研究』 東京：大修館書店.
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味I』 東京：くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 2』 東京：くろしお出版.
- 野田尚史 (1991) 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」 仁田義雄 (編) 『日本語のヴォイスと他動性』 東京：くろしお出版.
- 前田直子 (1989) 「使役受動態」の意味と用法』『言語・文化研究(Studies in Language and Culture)』 7: 25-32, 東京外国語大学.
- 松下大三郎 (1977) 『標準日本語口語法』 東京：勉誠社.
- 村上三寿 (1986) 「うけみ構造の文」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学：言語学研究会の論文

集』1: 7-87, 東京：むぎ書房.

コーパス

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(最終検索：2025 年 5 月 12 日)

中国語の“V 掉”、“V 下”の意味・機能とその拡張の動機づけ

王 鈺

キーワード：力学的関係、空間的關係、文法化

1 はじめに

現代中国語において、“掉 (diao, 落ちる)”、“下 (xia, 降りる/下がる)”は、同様に移動物が垂直方向、特に上から下への位置変化を起こすという下降移動義を表す。また、本動詞から拡張された複合動詞“V 掉”、“V 下”には、(1) と (2) のように、類似した意味・機能が存在している。

- (1) a. 摘掉眼鏡 / 摘下眼鏡 「メガネを外す」
b. 卸掉包袱 / 卸下包袱 「肩の荷を下ろす / 荷物を下ろす」
- (2) a. 吃掉饺子 / 吃下饺子 「餃子を食べる」
b. 输掉比赛 /* 输下比赛 「試合に負ける」
c. * 惹掉麻烦 / 惹下麻烦 「トラブルを招く」

(1) では、“V 掉”、“V 下”は、“摘 (zhai, 外す)”、“卸 (xie, 下ろす)”との結合によって、物を本来の位置から引き離すという分離義を表している。しかし、(1b) のように、目的語が“包袱 (荷物)”である場合、“V 下”は、物理的な分離事象の場面に偏るのに対し、“V 掉”は、肩の荷を下ろすという心理的負担に関わる抽象的な分離事象を表すこともできる。一方、(2) では、意味の文法化により、“V 掉”、“V 下”は、後項動詞の実質的意味が希薄化し、前項動詞の表す動作/行為の完遂または状態が極度に至るというアスペクトの文法的機能を持つ。この完遂・極度義を表す“V 掉”、“V 下”は、(2a) のように、同様な前項動詞と結合できる場合がある一方、(2b)、(2c) のように、前項動詞との結合の容認度が異なる場合も見られる。

本研究は、“V 掉”、“V 下”は意味・機能に関してどのような違いがあるか、また、その違いがどのような動機づけをもとに生じるかを明らかにすることを目的とする。論文の構成は以下の通りである。2 節では、下降移動義を含む動詞の意味特徴と文法化

に関する先行研究を概観し、本研究の立場と仮説を示す。続く 3 節では、意味と形式の側面から、本動詞“掉”、“下”の類似点と相違点を論じる。4 節では、コーパス調査を通して、複合動詞“V 掉”、“V 下”の意味・機能と拡張の認知メカニズム・動機づけを考察し、本動詞における意味的關係性との繋がりを解明する。最後の 5 節は、本研究の結論と今後の課題を提示し、“V 掉”、“V 下”はそれぞれどのように位置付けられるかを提案する。

2 先行研究と本研究の仮説

2.1 下降移動義を含む動詞の意味的特徴に関する先行研究

中国語において、“掉”、“下”、“落”などの動詞は、相対的な下降変化を含むことで共通する一方、それぞれの意味的特徴には違いが存在する。まず、先行研究において、下降移動義を含む各動詞の意味的特徴はどのように捉えられてきたかを概観する。

従来の先行研究では、“落 (luo, 落ちる)”と比較しながら、“掉”の意味的特徴を論じる観点がある。田 (2015) は、“掉”と“落”を移動動詞として捉え、両動詞は、共起語と文脈の点で違いがあると指摘した。「述語 (V) + 対象目的語 (N)」という構文において、“掉”、“落”は、両方ともに、“花”、“灰 (埃)”、“泪/眼泪 (涙)”と共起可能である。両動詞は、移動物が本来の位置から分離され、そして下降移動が生じるという事象連鎖を表している。しかし、目的語が“牙 (歯)”、“头发 (髪)”、“体重”である場合、“掉”のみが使用可能であり、“落”の使用が容認されない。この場合の“掉”は、移動物が本来の位置から分離されるという状態変化を含意し、移動の方向づけは必ずしも垂直方向であるとは限らない。

また、「移動物 (N) + 述語 (V) + 場所目的語 (L)」という構文において、主語の移動主体が“飞机 (飛行機)”である場合、(3) のように、両動詞の使用可能な文脈が異なる。

(3) a. 飞机掉机场上，爆炸了。

「飛行機が空港に墜落して、爆発した。」

b. 飞机落机场上，稳稳地停住了。

「飛行機は空港に着陸し、安定して止まった。」

(田 2015: 125)

(3a) は、飛行機の重さと急劇な下降移動による空港に対する衝撃の結果を表すのに対し、(3b) は飛行機の緩やかな下降移動の過程を表す。文脈の違いから、“掉”は移動物自体の重さに関連する変化結果に焦点を当て、“落”は移動の過程に焦点を当てることで意味的特徴が異なると考えられる。

一方、先行研究において、“下”の意味的特徴を分析する際には、空間関係で対称性を持つ“上(shang, 上がる)”との比較を通して考察を進める立場が多い。任・于(2007)によれば、“上”と“下”の中心義は同様に物理的な移動を表す。また、中心義から周辺の意味への拡張のプロセスにおいて、“上”の表す事象には、着点要素が前景化され、移動主体が着点に到達するという段階が注目されるのに対し、“下”の表す事象には、起点要素が前景化され、移動主体が起点から離れるという段階が活性化される傾向がある。

また、Lakoff & Johnson (1980) による上下の概念メタファー (HAPPY IS UP, SAD IS DOWN) に基づき、多くの研究では、物理的移動事象から心理的移動事象への拡張に関して、“上”における高位置への上昇移動(例：“上台阶”¹)を、積極的な感情を伴う「正の移動」として認識している。それに対し、“下”における低位置への下降移動(例：“下台阶”)を、消極的な感情を伴う「負の移動」として捉えている。

以上からわかるように、類義関係にある“掉”と“落”の比較、反義/対称関係を持つ“下”と“上”の比較を通して、下降移動義を含む“掉”、“下”の表す移動には、いくつかの類似点が存在し、例えば、消極的な心的態度を伝達できる点で共通していることが明らかにされている。しかし、“掉”、“下”を対象とした直接的な比較を行った研究が管見の限り非常に少ない。両動詞は、使用状況と意味特徴ではどのような違いがあるか、明らかにされていない。

2.2 下降移動義を含む動詞の文法化に関する先行研究

前述したように、“掉”、“下”、“落”は、同様に下降移動義を表し、意味的に類似している。しかし、複合動詞“V落”は、アスペクト的な意味・機能を持っておらず、“V

¹ 中国語において、“上台阶”と“下台阶”は、「階段を上る/降りる」という物理的移動を表すだけではなく、心理的領域における比喩的用法として、“上台阶”は人生や仕事、能力などが次の段階に上がることを表現できるのに対し、“下台(阶)”は辞任の意味、または、強い態度を緩和し、面子を立てるための妥協・譲歩を表すことができる。

掉”、“V 下”よりも文法化の程度が低い。先行研究においても、特に、“V 掉”、“V 下”の文法化に注目したものが多く見られる。

“V 掉”の文法化に関する研究では、刘（2007）は、“V 掉”の中心義を「客体離脱（分離義）」として位置付けた上で、「客体消失（消滅義）」、「事態完遂/状態実現（完遂・極度義）」はどちらも「客体離脱（分離義）」から比喩的な拡張関係によって拡張したものであると主張した。また、“V 掉”の意味・機能の文法化現象に伴い、主観性の強化も見られる。文法化の程度が低い分離義、消滅義よりも、文法化の程度が高い完遂・極度義では、前項動詞が消極的な感情を表すという意味的制約が強くなり、話者の物事に関する主観的な心的態度が窺える。また、この消極的な感情は、分離義との関連性があると指摘されている。

(4) a. 这柿子烂掉了。「この柿は腐ってしまった。」

b.* 这柿子生掉了。「この柿は未熟だった。」

(5) a. 树叶都黄掉了。「木の葉が全部黄色くなった。」

b.* 树叶都绿掉了。「木の葉が全部緑になった。」

（刘 2007: 138）

(4) と (5) のように、完遂・極度義を表す“V 掉”は、分離義に含意される「物の破損」という部分的な状態変化の意味要素を継承するため、“生（未熟）”、“绿”などの物の初期状態を表す形容詞と結合できず、“烂（腐る）”、“黄”などの物の状態が悪化するという方向への変化を表す形容詞と結び付けられる傾向がある。

丸尾（2017）は、“V 掉”の完遂・極度義への拡張の要因は、その消滅義に含意される意味要素にあると主張している。“V 完（wan, 終える）”、“V 好（hao, 終える/ておく）”などの汎用性が高い結果補語との比較によって、“V 掉”の表す動作の完遂・極度義を支える主な動機づけについて、「対象の消失」という要因を挙げている。例えば、“吃（食べる）”という動詞と結びつく場合、“V 完”は、動作の完了を強調し、対象物は残っていてもよいことを表す。それに対し、“V 掉”は、行為の完遂を強調し、それが表す事象には、対象物の消失が必要となる。

“V 掉”の完遂・極度義を支える動機づけが、分離義に含意される対象の破損であっても、消滅義に含意される対象の消失であっても、先行研究で指摘されていたのは、

あくまでも“V 掉”の文法化の段階である。すなわち、完遂・極度義は、分離義から拡張されているか、それとも、分離義から消滅義への拡張のプロセスを経由し、完遂・極度義が生じるかという問題が注目されている。しかし、“V 掉”の各意味・機能の文法化は、本質的にどのような統一した認識メカニズムによって動機づけられるか、その問題まで掘り下げられていない。

一方、“V 下”の文法化現象とその完遂・極度義に関して、主に3つの捉え方が存在する。1つ目は移動義から拡張される結果義として捉える立場である。于(2006)は、「どの成分が移動するか、またどのように移動するか」という基準により、“V 下”の意味を7つに分けている。この7つの意味の中で、“V 下”の表す完遂・極度義は、対象移動物が移動後の位置と状態を保持するという結果義として捉えられる。

2つ目は文法マーカーという観点をういた捉え方である。李(2021)は、“V 下”における後項動詞“下”が目的語と直接的に共起可能かどうかという基準によって、その意味・機能を判断している。これによって、“跳下”(跳下桌子/下桌子(テーブルを下がる))と区別し、“摘下”(摘下眼鏡/*下眼鏡(メガネを外す))、“惹下”(惹下麻烦/*下麻烦(トラブルを招く))はどちらも文法マーカーとして捉えられる。この捉え方では、完遂・極度義と“V 下”の他の拡張義の性質を区別せず、いずれも文法マーカーとして認めた上で、文法化の段階性を考察する。

3つ目は文法化の段階と概念構造の違いを区別するという捉え方である。王(2023)は、“V 下”のプロトタイプ概念構造には、典型的な移動義の概念構造、離脱義の概念構造、到達義の概念構造という3つの下位構造が存在することを指摘している。また、“V 下”の意味・機能を移動義の範疇(文法化の程度が低い)、結果義の範疇、文法的機能の範疇(文法化の程度が高い)に分け、3つの概念構造との関連性を分析した上で、完遂・極度義を“V 下”の概念構造全体の中に位置付ける。

これらの捉え方は、いずれも“V 下”の文法化現象の特徴の一部を示しているが、“V 下”の完遂・極度義を支える動機づけはどのようなものであるかは、論じられていない。また、“V 掉”の完遂・極度義を支える動機づけとは違いがあるかについて、さらなる検討が必要である。

2.3 本研究の立場と仮説

本研究の考察対象“V 掉”、“V 下”は、方向補語または結果補語としての意味・機能

だけではなく、完遂・極度義という文法的機能まで拡張することで類似し、他の下降移動義を含む動詞と比べて意味の広がりが顕著である。一方、“了 (le, た)” という過去態/完了態を表示するテンス・アスペクト助詞と比べると、“V 掉”、“V 下” は完全に助詞の機能まで文法化されておらず、「半文法化的助詞」または「完遂体マーカ (completive marker)」と見なされる。Bybee et al. (1994) は、類型論的に異なる 30 以上の言語において、完遂体マーカが存在し、これらの完遂体マーカは、文法化の程度がやや低く、語彙本来の意味的特徴が保持されると指摘した。本研究は、このような立場を踏まえ、完遂・極度義を表す“V 掉”、“V 下” を完遂体マーカとして捉え²、以下の仮説を立てている。

(6) 完遂体マーカ “V 掉”、“V 下” に関する仮説

- a. “掉”、“下” は同様に下降移動義を表すが、意味的特徴と中核的な意味的關係性が異なる。
- b. “V 掉”、“V 下” には、本動詞 “掉”、“下” の意味的關係性が保持される。完遂体マーカとしての意味・機能も、それぞれの関係性から影響を受ける。
- c. “V 掉”、“V 下” に含意される意味的關係性が異なるため、別の動詞クラスとして位置付けられるべきである。

この仮説を検証するために、次節から、北京語言大学コーパスセンター (BLCU Corpus Center) による現代中国語コーパス (以下、BCC コーパス) の用例を用いて考察を進める。

3 本動詞 “掉”、“下” の意味的・形式的特徴

3.1 「述語 (V) + 移動物 (N)」における “掉”、“下”

本節では、本動詞 “掉”、“下” の意味的・形式的特徴を考察し、その類似点と相違点を分析する。

まず、場所格が文中で出現しない場合、“掉”、“下” は同様に「述語 (V) + 移動物 (N)」という構文形式をとることができる。移動物が “雨”、“雪”、“冰雹 (雹)” など

² 本研究は、李 (2021) の立場と異なり、完遂・極度義とそれ以外の拡張義を区別し、完遂・極度義を表す “V 掉”、“V 下” のみを完遂体マーカとして認める。

の自然物であり、気候現象を描く際に、両動詞には大きな違いが見られない。

- (7) a. 时浓时淡的烟岚飘然于上，不一会掉雨点了。 (《人民日报》1987)
「濃くなったり淡くなったりする霧が、(ふわりと) 立ち上り、まもなく雨が降り始めた。」
- b. 全国各地普遍下雨，大部地区旱象已除。 (《人民日报》1950)
「全国的に雨が降り、ほとんどの地域で干ばつは解消した。」

(7) のような気候現象表現では、特定の使役主が存在せず、移動物の自発的な下降移動を表す。本動詞“掉”は、自動詞であり、一般的に、移動物が動詞の前に出現するという「N+掉(下/下来)」の構文形式で使用される。「掉+N」のように、他動詞の構文形式で自発的な移動を表す語例に関して、主に3つの意味タイプが抽出される。

表1 「掉+N(移動物/分離物)」の意味タイプ(BCCコーパスに基づく)

意味タイプ	Nの語例/頻度数
【A】下降移動	眼泪(涙)/2893、馅饼(パイ) ³ /587、价(価値)/16
【B】体/物全体の部分的変化	链子(チェーン)/462、肉/421、牙(歯)/309、漆(ペンキ)/112
【C】物の紛失(所有権の喪失)	钱(金)/236、钱包(財布)/42

これらの3つの意味タイプにおいて、意味タイプAの「下降移動」のみが、動的移動関係と明確な方向性を含意する。一方、他の2つのタイプでは、移動物の位置変化の方向性が判断できないとともに、話者が物の位置変化よりも、物の状態変化に焦点を当てている。(8)と(9)はそれぞれ意味タイプBの「体/物全体の部分的変化」と意味タイプCの「物の紛失」に当たる用例である。

- (8) 如能有效控制牙周病，就能减少牙齿脱落的机会，甚至终生不掉牙。
(《文汇报》2003)
「歯周病を効果的にコントロールすることができれば、歯の喪失リスクを大幅に軽減でき、生涯にわたって歯が抜けない可能性も高まる。」

³ “掉馅饼”は、一般的に、比喻関係によって拡張される慣用句として使用される。パイが空から落ちてくるような、予期しない幸運を指す。日本語では、類似している表現として、「棚からぼたもち」という慣用句が存在する。

- (9) 小郑找到车上掉钱包的那个社员问明原委，将装有六百元的钱包交还失主。

(《福建日报》1984)

「小鄭は車内に財布を落とした社員を見つけて事情を確認し、六百元が入った財布を持ち主に返還した。」

(8) は、歯が本来付着している歯茎から抜ける事象を表すが、その後、歯がどこに移動するかという動的移動関係は焦点化されていない。(9) は、財布が車内の地面に落ちたという物理的な位置変化を表すわけではなく、物の所有権が喪失されるという状態変化を表す。この事象において、動作主は非意図的に財布をどこかの位置に移動してしまうことで財布を失くす可能性もある一方、財布は位置変化を起こしていないものの、単に動作主がその存在の場所を忘れてしまったと解釈することも可能である。このため、これらの非意図的・自発的な移動/変化事象において、動的な移動関係は必須ではない。また、特定の使役主が存在しないため、物の移動/変化を引き起こす何らかの要因があると考えられる。その要因は、ある力実体として捉えられる。例えば、“掉”の表すタイプ A の「下降移動」は、自然力（重力）による位置変化である。タイプ B の「体/物全体の部分的変化」は、物の生理的变化や老化などという内在力または、非意図的な外力による部分的状態変化を表す。タイプ C の「物の紛失」は、注意力という認知的力による所有権の喪失を表す。このため、「掉+N（移動物/分離物）」という構文を支える中核的な意味的關係性は、空間的關係ではなく、力的關係であると考えられる。

一方、“下”は、自動詞と他動詞の用法の両方を持つ。また、気候現象表現以外に、基本的に意図性のある移動を表す。コーパスデータに基づき、「下+N」の表す意味・機能には、次の3つの意味タイプが存在する。

表2 「下+N（移動物）」の意味タイプ（BCC コーパスに基づく）

意味タイプ	N の語例/頻度数
【A】下降移動（移動全体）	腰/3590、毒/1545、雨/1435、雪/912、饺子(餃子)/153
【B】開始動作（起点焦点化）	手/4614、措施(措置)/1403、命令/997、杀手(切り札)/824、筷子(箸)/576
【B】到達動作（着点焦点化）	结论(結論)/816

これらの3つの意味タイプは、いずれも空間関係を含む移動事象として捉えられる。意味タイプAの「下降移動」では、“下毒（毒を盛る/入れる）”、“下饺子（餃子を（鍋に）入れる）”のような動作主による移動物の使役的下降移動を表す語例と、“下腰（腰を反らす）”のような動作主の身体姿勢の位置変化という自立的下降移動を表す語例が見られる。一方、移動の全段階を含む意味タイプAと区別し、意味タイプBの「開始動作」と意味タイプCの「到達動作」はそれぞれ移動の起点と着点の一方のみが焦点化されるが、意味タイプAと同様に下降移動という動的な移動関係が捉えられる。

(10) 这不能怨刑部大堂的刽子手无能，只怨袁大人乱下命令。 （莫言《檀香刑》）
「このことは刑部の処刑人の無能さを責めるべきではなく、すべて袁大人の無茶な命令に原因がある。」

(11) 围观的人们都聚精会神地看着他，好像病人家属期待着医生给自己的亲人下结论。
（莫言《牛》）
「周囲の人々の視線は彼に集中しており、まるで医者が身内に診断を下すのを、患者の家族が固唾を吞んで待っているかのようなようだった。」

(10) では、動作主が命令を下す対象は、自分より身分/地位が低い人である。命令が抽象的な移動物として、身分が高い人から低い人に移動する。(11) の“下结论”は、単に検討の末に結論に達したという到達動作を表すだけではない。その動作を行う動作主は一般的に専門的知識や主導権を持つ人である。動作主が自分の経験や知識に依拠し結論を下すのは、その結論を専門知識を持たない人に伝達する意味を含む。これによって、「下+N」という構文形式に着目すると、垂直方向である上下概念を含む空間的關係は、“下”の各意味・機能における中核的な意味的關係性であると言える。

3.2 「移動物（N）＋述語（V）＋場所格（L）」における“掉”、“下”

場所格が文中で出現する場合、“掉”、“下”は、「移動物（N）＋述語（V）＋場所格（L）」という構文を取ることができる。この場所格は、静的場所・位置関係を示す背景・参照点として、起点と着点のどちらかを指す。

場所格が起点である場合、“掉”に関して、“掉队（隊列から遅れる/仲間から外れる）”、“掉线（回線が切れる）”などが挙げられる。これらの語例は、「掉+N」の構文形式と

同様に、何らかの力による非意図的・自発的移動/変化を表すが、下降移動という方向性を表さない。また、話者が期待・予期しない変化表現であるため、消極的な心的態度を伝達する傾向がある。“下”が述語である場合、この構文は、移動主体が行為/状態を起点として、その起点から離れるように、行為/状態を終結するという意味を表す。“下班（退勤する）”、“下线（回線を切る）”⁴のような意図性のある移動表現が多いが、“下岗（失業する）”のような意図性のない表現も存在する。また、場所格が着点である場合、“掉”の用法は限られ、物理的な下降移動の場面のみで使用可能である。それに対し、“下”は、“下海（起業する）”、“下基层（現場に赴く）”などの抽象的な位置変化の場面にも用いられる。

以上のように、場所目的語を取る構文形式に関して、“掉”、“下”の表す事象には、移動の起因や動作の意図性の有無、位置変化の抽象化などの点で違いが見られる。対象目的語を取る構文形式と同様に、両動詞における意味的關係性が異なると想定できる。

3.3 本節のまとめ

本節では、“掉”、“下”の意味的特徴とそれらが表す事象の特徴の考察を通して、両動詞は、共起可能な目的語と文脈が異なるだけでなく、各動詞における中核的な意味的關係性も異なり、それぞれ「力的関係」と「上下の空間的關係」に当たることを明らかにした。以下の表3のように、意味と形式の側面から、“掉”、“下”の特徴をまとめる。

表3 “掉”、“下”の意味的・形式的特徴

	意味	形式
掉	力実体（自然力/内在力/認識の力など）による非意図的・自発的移動/変化（消極的感情を含意する表現が多い）	「N+V（下/下来）」、 「V+N」、 「N+（在）+V+L」
下	上下の空間的認識に基づく物理的/抽象的移動（意図的移動表現が顕著であり、非意図的移動表現も存在する）	「V+N」、 「N+V+L」


⁴ “掉线”、“下线”のように、“掉”と“下”は同様に、ネットや通信状況から離れるという抽象的な移動を表す。しかし、“掉线”は、何らかの原因で回線が自然に切れることを表すのに対し、“下线”は、動作主が意図的に回線を切って通信を終結することを表す。

4 複合動詞 “V 掉”、“V 下” の意味・機能と動機づけ

4.1 “V 掉” の意味パターンと力学的関係

続いて、複合動詞 “V 掉”、“V 下” の意味・機能および本動詞との関連性を論じる。本研究は、王 (2024) の分類方法と同様に、“V 掉” の表す事象類型に着目することで、その意味・機能を 4 つの意味パターンに分類する。

表 4 “V 掉” の意味パターンと文法化の段階

意味パターン	V1 の動詞類型	力学的関係に基づく変化事象		文法化
		状態変化	位置変化	
パターン 1 分離事象型	使役変化動詞 (剪(切る)、割(刈る)、剥(剥く)) 使役移動動詞 (脱(脱ぐ)、抜(抜く)、卸(外す))	○	○	
パターン 2 単純移動型	自律移動動詞 (走(歩く/離れる)、跑(走る)、溜(滑る/こっそり逃げる)、逃(逃げる)、飞(飛ぶ)) 使役移動動詞 (放(逃す)、扔(投げる)、丢(捨てる))	×	○	
パターン 3 消滅事象型	消耗・消失動詞 (烧(焼く)、拆(解体させる)、吃(食べる)、删(削除する)、除(駆除する))	○	×	
パターン 4 完遂・極度型	授受義動詞 (送(送る)、卖(売る)、还(返す)、赔(損する)) 心理動詞 (忘(忘れる)、戒(やめる)、忽略(無視する)) 変化動詞・形容詞 (输(負ける)、死(死ぬ)、疯(狂う)、烂(腐る)、臭(臭くなる)、冷(冷める))	○	×	

この 4 つの意味パターンのうち、中核的なパターン 1「分離事象型」には、状態変化と位置変化の両方が含まれる。他の意味パターンでは、状態変化と位置変化の一方のみが前景化される。その中で、パターン 2「単純移動型」では、位置変化が前景化されるのに対し、意味パターン 3「消滅事象型」とパターン 4「完遂・極度型」では、状態変化が前景化される。

また、“V 掉” は、“掉” における意味的關係性を継承し、これらの 4 つの意味パターンはいずれも力による移動/変化事象として認められる。しかし、“掉” の表す事象では、単一的な力実体（移動/変化を起こす要因）による力的関係が見られるのに対し、“V 掉” の表す事象では、2 つの対抗した力実体による相互作用が捉えられる。本研究は、単一的な力実体による「力的関係」と区別し、“V 掉” における力的関係を、「力学

的關係」と称する。

「力学的關係」とは、動力学的認知に基づく作用と反作用といった力の相互作用を示すものである。この意味的關係性を捉える言語モデルとして、Talmy (2000) によって提唱された力動性モデル (Force Dynamics Model) が存在する。このモデルでは、力のバランスによる相互作用をいくつかのパターンに図式化している。必須の關係参与者として、本来的に何らかの初期傾向を持つ力実体は主動体 (agonist) と呼ばれるのに対し、主動体に反する力を持つ力実体は対抗体 (antagonist) と呼ばれる。以下、この2つの力実体による相互作用は、各意味パターンにおいてどのように捉えられるかを説明する。

“V 掉”の意味パターン1「分離事象型」では、分離元、分離物、動作主の3つの参与者が存在する。主動体となるものは分離物であり、対抗体となるものは動作主である。分離元と分離物の空間的關係は、主動体の初期的傾向性 (静止/活動) を示す。

(12) 机器把甜菜翻起来，立即就把叶子切掉放在一边，把菜根放到了另一边。

(《人民日报》1952)

「機械は甜菜をひっくり返し、すぐに葉を切り落として片側に置き、根をもう一方に置いた。」

(13) 门板和门框上满是钉子眼，可门栓却拔掉了。 (高行健《一个人的圣经》)

「扉の板と枠には釘の穴がいっぱいだったが、扉のかんぬきは抜かれていた。」

(12) では、分離物 (葉) と分離元 (甜菜) は「全体-部分」の空間的關係に当たり、物理的一体性を持つ。主動体は本来的に静止傾向にあるが、動作主 (機械) が対抗体として、主動体に分離動作の力を行使した。主動体が対抗体からの力を受けたことによって、一体性が失われ、内在的傾向性が静止傾向から活動傾向へ変わる。一方、(13) のように、分離物 (扉の板、扉の枠) と分離元 (扉のかんぬき) は、本来的に「表面-付着物」の關係に当たり、物理的一体性が捉えられない。主動体は自由に移動できるという活動傾向として示される。動作主 (文中には出現しない) は対抗体として、主動体に力を行使し、分離物を分離元に付着・固定させることで、分離物と分離元は、主観的/機能的に一体化しているように見える。この時点で主動体は活動傾向から静止傾向へ変わる。その後、主動体は、対抗体からの分離動作によって働きかけられた結果、一体

性が失われ、静止傾向から初期の活動傾向へ戻る。(12) と (13) の表す 2 つのタイプの分離事象では、異なる力学的関係の形式が捉えられるが、両方ともに、力の相互作用によって、分離物の位置変化と分離元の状態変化が生じるという複合的な事象を表す。

意味パターン 2「単純移動型」では、主動体となるものは移動主体/移動物であり、対抗体は、主動体の移動に障害を与えるものである。

(14) 有一天，它捉住了三只小猪。(…) 小黑猪很聪明，它乘狼不备，没命地逃掉。
(《人民日报》1959)

「ある日、オオカミは三匹の子豚を捕まえた。(…) 黒い子豚はとても賢く、オオカミが油断している隙に、必死に逃げ去った。」

(14) では、移動主体（豚）は、主動体として、本来的に自由に移動できる活動傾向にある。対抗体（オオカミ）は、“捉（捕まえる）” という動作を働きかけ、主動体の移動のプロセスに何らかの妨害を与える。その結果、主動体が対抗体からの力を受け、自由に移動できなくなり、活動傾向から静止傾向へ変わる。その後、豚はオオカミが油断している隙に、必死に逃げ去ったということから、対抗体の力が緩和され、主動体の力が強くなるという力のバランスの変化が見られる。力の相互作用により、主動体は静止傾向から活動傾向へ戻る。すなわち、豚は移動の妨害を取り除き、逃げて離れるという位置変化の結果に至る。

また、意味パターン 3「消滅事象型」では、主動体は消滅物であり、対抗体は動作主である。

(15) 仅在非洲，每年有 500 万英亩森林被当作燃料烧掉。（路遥《人生》）
「アフリカだけでも、毎年 500 万エーカーの森林が燃料として焼かれている。」

(15) では、“V 掉” の前項動詞は消失・消耗義を表す動詞である。消滅物（森）は主動体として、本来的に一体のものであり、安定した形状/量を持ち、その初期傾向は静止傾向として示される。動作主（文中に出現しない）は対抗体として主動体に力を行行使する。その結果、森が形状や数量的変化へ向かうという活動傾向に変わり、消滅の結

果に至る。

最後に、意味パターン4「完遂・極度型」では、心理領域における力学的関係が際立つ。主動体は目的語項となるものではなく、話者または動作主が行為の達成に対して消極的な心理的初期傾向を持つ事柄である。対抗体は、主語項となるものではなく、行為の達成を推進する現実的要因である。

(16) 经过反复的思考后、他决定把澳大利亚公司的先进设备卖掉 10 台。

(《人民日报》2003)

「熟慮の末、彼はオーストラリア企業の先進的な設備のうち、10 台を売ってしまうことを決定した。」


(16) のように、前項動詞“卖(売る)”は、授受関係を含意する動作動詞である。この場合の“V 掉”は、完遂体マーカーへ文法化し、具体的な結果変化ではなく、V1 の表す動作/行為の完遂を表す。動作主は、本来的に「先進的な設備を売る」という事態の達成に対する心理的抵抗性を持ち、消極的な態度が示される。このため、主動体の初期傾向は、静止傾向であると捉えられる。会社の倒産などの現実的要因は対抗体として、主動体に対抗する力を加え、主動体は「先進的な設備を売る」の事態を達成しなければならない状態になる。また、対抗体の力は主動体の力よりも強いいため、動作主は、「先進的な設備を売る」という事態を消極的に推進する。最後に、主動体は、静止傾向から活動傾向へ変化し、状態変化が生じる。すなわち、「先進的な設備を売る」という事態が徹底的に達成される。

以上の分析のように、複合動詞“V 掉”が本動詞“掉”の「力的関係」を継承し、さらにその意味的關係は、力の相互作用を含む「力学的関係」へ拡張している。この関係性は、完遂体マーカーを支える動機づけだけではなく、“V 掉”の文法化の各段階においてすべて捉えられる。

4.2 “V 下”の意味パターンと空間的關係

次に、“V 下”の意味・機能とその文法化を考察する。“V 下”の表す事象の特徴に着目することで、表5の通り、“V 下”の意味・機能を4つの意味パターンに分類する。

表5 “V 下”の意味パターンと文法化の段階

意味パターン	V1 の動詞類型	空間的關係に基づく移動事象		文法化
		起点	着点	
パターン1 下降移動型	自律移動動詞（走(歩く)、坐(座る)、垂(垂れる)） 使役移動動詞（推(押す)、放(置く)、传(渡す)）	○	○	
パターン2 分離・開始事象型	分離動詞（脱(脱ぐ)、卸(外す)、剪(切る)）	○	×	
パターン3 到達事象型	停留動詞（停(止まる)、留(止まる)、住(住む)） 容量動詞（塞(詰める)、存(蓄える)、吃(食べる)）	×	○	
パターン4 完遂・極度型	授受義動詞（买(買う)、赚(稼ぐ)、惹(招く)） 心理動詞（忍(我慢する)、记(覚える)、承受(耐える)） 変化動詞（活(生きる)、赢(勝つ)、生(生む)）	×	○	

この4つの意味パターンは、いずれも本動詞における空間的關係を継承し、移動事象に該当すると考えられる。それぞれの表す移動事象において、焦点化される段階と要素には違いが見られる。中核的意味パターン1「下降移動型」では、移動全体が捉えられるのに対し、他の拡張的な意味パターンでは、一部の段階と要素だけが焦点化される。

空間的關係に基づく下降移動事象には、必須の關係参与者として、焦点（移動主体/移動物）と背景（移動の起点/着点）の2つが存在する。また、この2つの参与者は、＜静的な場所・位置の關係＞と＜動的な移動關係＞によって關係づけられる。＜静的な場所・位置の關係＞は、移動主体/移動物が、起点/着点に対してどのように位置するかという相対的な位置（移動後、移動物が起点に対して「下」に位置する）を表す。＜動的な移動關係＞は、移動主体/移動物が、起点から何らかの経路を経由し、着点に到達するという位置の変化（上から下へ移動）を表す。

“V 下”の意味パターン1「下降移動型」では、移動主体/移動物は、初期の位置である起点から離れ、最後に下の位置である着点に到達するという移動全体が捉えられる。

- (17) 我们必须走下三个台阶,才能来到一间大厅。 （埃克多・马洛《苦儿流浪记》）
「私たちは階段を三段降り、ようやく広間に着いた。」
- (18) 甚至连祖先传下的事业,都因为受到统制而不得不放弃。

(吴浊流《亚细亚的孤儿》)

「先祖から受け継いだ事業さえも、統制を受けて放棄せざるを得なかった。」

(17) は、動作主体の、階段の上から下への物理的な下降移動を表す。(18) は、事業が移動物として、先祖から後継へ伝達されるという抽象的な下降移動を表す。この 2 つの“V 下”の用例は、本動詞“下”における垂直方向づけを保持し、移動の起点、経路、着点といった各移動要素を全て含む。

一方、“V 下”の意味パターン 2「分離・開始事象型」に関して、話者が注目しているのは、移動主体/移動物が起点から離脱するという開始/初期段階である。

(19) 但我又觉得在他身上有许多矛盾，似乎始终没有脱下“五四”时期知识分子的长衫。
(《人民日报》1962)

「しかし、彼の中には多くの矛盾があるようにも感じられ、まるで「五・四」時代の知識人の長袍をいまだに脱ぎ捨てていないかのようにだった。」

(19) は、長袍を身体から分離するように、知識人が固定された価値観を脱ぎ捨てることを表すという比喩的用法である。また、“V 下”の表す分離事象は、“V 掉”の表す複合的な分離事象とは異なり、分離物の位置変化の開始段階に焦点を当てる単純な移動事象として捉えられる。この意味パターンでは、垂直方向という意味的特徴が希薄になり、全ての用法は必ずしも下降移動に当てはまるとは限らない。

意味パターン 3「到達事象型」は、意味パターン 2「分離・開始事象型」と同様に、移動の全段階が注目されておらず、一部だけが焦点化される。このパターンに関して、話者が注目しているのは、移動主体/移動物が着点要素に向けて移動し到達する段階である。

(20) 公共汽车拐过弯，驶到前面缓缓停下。
(吉本芭娜娜《厨房》)

「バスは角を曲がって前方へ進み、ゆっくりと停まった。」

(21) 加上主耶稣的帮助，我可以捱到春天，还可以存下一点钱粮。(莱蒙特《农民们》)

「主イエスのお助けがあれば、私は春まで耐え忍ぶことができ、少しばかりの金と食料を蓄えることもできるでしょう。」

(20) のように、停留義を表す前項動詞との結合によって、“V 下”は、バスが着点に到達するという位置変化を表すだけではなく、その場所に止まるという意味を含む。また、(21) のように、量の概念に関連する容量動詞との結合によって、一定の量である金と食料が動作主に帰属し所有されるという意味を表す。この意味パターンでは、「物の位置の定着」、または「物の獲得」という新たな意味的特徴が生じる一方、下降移動という意味的特徴が完全に喪失する。

最後に、意味パターン 4「完遂・極度型」では、意味パターン 3 と同様に、移動事象における着点要素が焦点化される。“V 下”は、移動物が行為/状態の終結点に到達するように、行為が完遂されるまたは状態が極限に達することを表す。次の用例が挙げられる。

- (22) 她用退休金买下一幢房子出租,兼供部分房客的一日三餐。 (杨绛/《我们仨》)
「彼女は年金を使って一軒の家を購入し、それを貸し出すとともに、一部の下宿人には一日三食の食事も提供している。」
- (23) 如此代代年年赢下了好名声。 (《人民日报海外版》2017)
「このように、世代を超えて年々良い評判を勝ち取ってきた。」

(22) の前項動詞“买(買う)”と (23) の前項動詞“赢(勝つ)”は、移動物が着点である動作主の領域へ向けて移動するという「求心型」の方向づけを持つ抽象的な移動事象を表す。意味パターン 4 の“V 下”は、意味パターン 3 の“V 下”における「物の獲得」という意味的特徴を継承するため、移動物である部屋や評判が動作主の領域へ向けて移動し、最後に動作主に帰属・所有されるという形で、購入動作の完遂、好評を得る状態の定着を表す。すなわち、“V 下”の完遂体マーカーとしての意味・機能においても、空間的關係に基づく認知メカニズムが捉えられる。

以上により、“V 下”は、本動詞“下”における空間的關係を継承しているが、一部の意味的特徴が希薄になる、または喪失する。“下”の表す移動事象では、物理的な下降移動と抽象的な下降移動が見られるのに対し、“V 下”の表す移動事象では、垂直方向の移動が見られる一方、水平方向の移動も存在している。

4.3 本節のまとめ

本節は、“V 掉”、“V 下”の各意味・機能およびその意味拡張を支える認知メカニズム・動機づけを考察し、「力学的関係」と「空間的關係」という意味的關係性の違いを明らかにした。表 6 に 2 種類の關係性の詳細を示す。

表 6 力学的關係と空間的關係の詳細

	必須の關係参与者	關係の種類	中国語の動詞例
力学的關係	主動体、対抗体	＜物理的な力＞ ＜社会力学的な力＞ ＜認識的な力＞	V 掉
空間的關係	焦点、背景	＜靜的な場所・位置の關係＞ ＜動的な移動關係＞	V 上、V 下

5 まとめ

本研究は、完遂体マーカ―“V 掉”、“V 下”に関する仮説を検証し、また、その仮説を具体化した。このことから 3 点の示唆が得られる。

1 つ目は、本動詞“掉”、“下”における中核的な意味的關係性が異なることである。

“掉”の表す事象は、使役主が存在しない、特定の力による非意図的・自発的移動/変化であるため、「力的關係」がその中核的な意味的關係性となる。“下”の表す事象は、動作主の意図性がある自律移動/使役移動を表し、「空間的關係」がその中核的な意味的關係性となる。このため、両動詞は同様に下降移動義を持つが、移動事象の起因と特徴が異なると言える。

2 つ目は、“V 掉”、“V 下”は、本動詞における意味的關係性を継承し、それぞれの意味・機能の拡張を支える認知メカニズム・動機づけが異なることである。また、本動詞から複合動詞への文法化において、その意味的關係性が完全に保持されるわけではなく、一部の意味的特徴が喪失する一方、新たな意味的特徴も捉えられる。“掉”は単一の力実体による「力的關係」を含むのに対し、“V 掉”は 2 つの対抗する力実体の相互作用による「力学的關係」を含意する。“下”は、上下概念を含む垂直方向の空間的關係に当たる。それに対し、“V 掉”の空間的關係では、方向づけに関して特に制限が見られない。

3 つ目として、上の 2 点の示唆を踏まえると、“V 掉”と“V 下”をそれぞれ別の動詞クラスとして位置付けるべきである。“V 掉”と“V 下”は、本動詞や複合動詞の意味・機能で類似点が存在する一方、本質的に異なる種類の意味的關係性に基づく動詞

である。“V 下”は、空間的關係に基づく移動動詞であり、“V 掉”は、力学的關係に基づく力学動詞⁵であると考えられる。今後、これらの意味的關係性を用いて、“V 掉”と“V 下”の結合制限の違いに関する説明を試みる。

参考文献

- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The evolution of grammar: Tense, aspect, and modality in the languages of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- 李卫芳 (2021)「再谈 V 上和 V 下」『华文教学与研究』1: 32-40.
- 刘焱 (2007)「“V 掉”的语义类型与“掉”的虚化」『中国语文』2: 133-143.
- 丸尾誠 (2017)「中国語の結果補語“掉”の用法について—完遂義を中心に—」『言語文化論集』38(2): 47-60, 名古屋大学.
- 任鷹・于康 (2007)「从“V 上”和“V 下”的对立与非对立看语义扩展中的原型效应」『汉语学习』4: 13-20.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a cognitive semantics, volume1: Concept structuring systems*. Cambridge, MA.: MIT Press.
- 田碩 (2015)「移动性同义动词“落”“掉”的含义区别」『黑龙江教育学院学报』34(10), 124-125.
- 王嘉天 (2023)「“V 下”的概念结构及隐喻扩展路径」『汉语学习』2: 50-59.
- 王鈺 (2024)「中国語の分離動詞“V 掉”の意味特徴と多義化プロセス」『認知機能言語学研究』9: 1-16, 大阪大学.
- 于康 (2006)「“V 下”の语义扩展机制与结果义」日中対照言語学会(編)『中国語の補語』209-231, 東京: 白帝社.

コーパス

北京語言大学コーパスセンター (BLCU Corpus Center) 現代中国語コーパス (BCC):
<https://bcc.blcu.edu.cn>

⁵ 人間の知覚的認知に関わる従来の研究では、力学的關係を主要な対象としたものがあまり多くない。力学的概念は、実際に数多くの言語において広範に存在し、動詞の意味拡張や事象の言語化などという様々な言語現象に影響を与えている。今後、力学動詞という新たな動詞クラスを確立するために、動詞の意味的特徴と構文形式を精緻化する必要がある。

英語の軽動詞構文研究の進展と課題（１）

小栗 哲哉*

キーワード：軽動詞構文、動詞中心的アプローチ、名詞中心的アプローチ

1 はじめに

英語には、軽動詞構文 (light verb construction) と呼ばれる (1) のような表現がある。

- (1) a. Here, *have a look* at this.
b. *Take a look* at these figures!
c. Make sure you *get a good look* at their faces.

(Oxford Learner's Dictionaries, 強調は筆者)

(1) の動詞 *have*, *take*, *get* は、目的語に不定冠詞と動詞の不定形と同形をとる。Jespersen (1942: 117) は「軽動詞」(light verb) と呼んだ。このような構文は日本語をはじめとする他の言語でも見られ、従来から多くの研究が積み重ねられてきた。

本稿の目的は、英語の軽動詞構文に関する先行研究を俯瞰し、その要点と課題を概観することで、今後の研究がとるべき方向性を探ることである。本稿の構成は、以下の通りである。2 節で、英語の「軽動詞構文」に関する従来の研究を概観し、構文一般の基本的特徴を順に検討する。3 節では、先行研究での観察を踏まえ、様々な軽動詞がどのような意味の名詞類と共起するのかを考察し、各軽動詞の構文的意味を概観する。4 節では、Jespersen (1942) に代表される伝統文法の考え方とは対照的に、軽動詞も構文の解釈に意味的に貢献していると考え近年の研究を概観し、その課題を述べる。最後の 5 節で本稿の議論をまとめる。なお、筆者が考えるその課題の解決策については、別稿にて論じることとする。

* 本稿は、Kogusuri (2024a, 2024b)、小栗 (2024b)、小栗 (2025) の内容を一部含む。これらの成果をまとめるにあたって貴重なご指摘、コメントをいただいた全ての方に心より感謝申し上げます。本研究は、JSPS 科研費 22K00508 および 25K04041 の助成を受けている。

2 軽動詞構文の基本的特徴

現代言語学における英語の軽動詞構文研究の重要なものとして、Live (1974), Wierzbicka (1982), Cattell (1984), Dixon (1991/2005), 相沢 (1999), Kearns (1988/2002) が挙げられる。以下では、これらを含む先行研究を概観しながら、次の二点を検討する。まず、本節では、軽動詞構文一般が、どのような形式的・意味的特徴をもつ構文であるのかについて考察する。続く3節で、軽動詞構文がどのような意味を表し得るのか、4つの軽動詞を取り上げ、共起する名詞の意味タイプを検討した研究を概観する。

2.1 意味的に「軽い」動詞

英語の軽動詞構文の重要な特徴の一つとして、これまでも何度か触れた、動詞の意味的「軽さ」が挙げられる。Jespersen (1942) は、意味が「軽い」動詞の後に、行為を表す名詞が来るとしており、さらにこの動詞が「取るに足りない動詞」(an insignificant verb) であると表現している¹。Poutsma (1926: 394-395) では、(2) の例を挙げ、これらの主動詞がはっきりとした意味を持たないこと、対照的に、目的語名詞の方が具体的行為を表し、述語として重要な役割を担うことを指摘している²。

- (2) {give / make} {an answer / a reply}, make a call, {give / raise / set up / utter} a cry,
 {drop / make} a curtsy, {make / give} a promise, {make / pay} a visit, give my friend
 a call

Cattell (1984: 2) でも、軽動詞が「構文の意味解釈にはほとんど貢献していない」と明確に述べている³。

別の見方をすれば、軽動詞はその語彙的意味が薄れ、意味的に漂白 (bleached) を起こしており (岸本 2001: 131, Butt and Lahiri 2013 など)、実質的にはどの軽動詞も同じような意味機能を有していると考えられるかもしれない。例えば、{have / take / make /

¹ “... the general tendency of ModE to place an insignificant verb, to which the marks of person and tense are attached, before the really important idea ...” (Jespersen 1942: 117)

² Poutsma (1926) は、さらに動詞が連結詞 (connective) の役割を担うとまで述べているが、しかし、そのように言い切ってしまうとよいかは疑問である。

³ “... the words make, give, have, take, and do seem semantically very ‘light’ (to use a term coined by Jespersen), and to mean very little more than that a verbal action occurred. This action is spelt out in the nominal that follows.” (Cattell 1984: 2, 強調は筆者)

give} a guess という表現は、いずれも「推測する」(guess) という意味を表す点で類似している (Live 1974: 33)⁴。動詞が異なっても互いに類義的であるという事実は、軽動詞が意味的に漂白し、実質的機能が同じであるという考えを支持するように思われる。

ただし、どの動詞が選択されるのか、相互にどういった違いがあるのかについては、先行研究でも指摘されているように、目的語名詞の意味クラスによる (イディオム・コロケーションとしての) 選好性や、イギリス英語 (やオーストラリア英語) とアメリカ英語のような方言 (dialect) による差異も関係する。

2.2 繰り返すことのできる不特定の行為を表す名詞

Wierzbicka (1982)、Dixon (1991/2005)、影山 (1996: 77-82) によれば、軽動詞の目的語には、繰り返すことのできる不特定の行為を表す名詞が立つという。例えば、(3) のように arrive や break のような、特定の方向づけのある位置変化・状態変化を表す表現は生起できないとされる。

- (3) a. * John had an arrive (from town before breakfast). (Dixon 2005: 67)
b. * John gave the door break. (Dixon 2005: 67)

これらは、時間の経過とともに方向性を持って展開する事態であり、意図された特定の状態を完結点 (telos) とする位置変化・状態変化である。気軽に何度も繰り返すことができるような不特定の行為とはみなせない。つまり、have a V 構文は非完結的な事態を表すという制約が課される (Wierzbicka 1982: 759, 776)。これに関連して、次の例のように、行為の対象が有限であったり、着点句をつけて目的を持った特定の地点への移動を表したりする場合、非文となることが指摘されている (Wierzbicka 1982: 776、相沢 1999: 63 など)。

- (4) a. * John had a drink of a litre of water. (Wierzbicka 1982: 776)
(cf. John drank a litre of water.)
b. * I'll have a walk to the post office. (相沢 1999: 63)

⁴ ただし、give a guess は他の表現よりもやや稀な表現と考えられる。

(cf. I'll wak to the post office.)

これらの例の非容認性は、対応する単純動詞文のものとは対照的である。

上の観察を踏まえると、軽動詞構文の目的語名詞には、活動述語や単一相 (semelfactive) 述語が生起するのではないか、と考えられるだろう。実際、影山 (1996) では、目的語位置には ACT や ACT ON で表されるような働きかけを表す名詞が生起し、ACT を表す場合には have が、ACT ON を表す場合には give の二重他動詞用法 (二重目的語構文) が選択されると主張している。

しかしながら、(5) の例を見ると、名詞が何らかの不特定の「行為」を表すという観察が一般的な傾向に過ぎないことが分かる (斜字体は筆者による)。

- (5) a. Carlos prodded his steak with his knife; *made a cut* but didn't eat. (COCA, 2015 FIC)
b. Do you want to *have a bite* of cake? (COCA, 2018 MOV)
c. Anna *gave* the room *a clean-up* before her mother arrived. (Stein 1991: 10)

(5a) や (5b)、(5c) の斜字体の表現は、対象の状態変化を表す表現である。ただし、これらは対象全体の状態変化というよりもその一部に対する変化であると捉えられる。具体的に言うと、(5a) ではステーキの一部を切ることを、(5b) ではケーキの一部をかじることを、(5c) では部屋の一部 (ベッドや床など、日々使う範囲の空間) を意味する。対象全体の影響が含意されず、部分的な影響にとどまる事態であるとすれば、繰り返し可能な行為としての側面が焦点化されていると捉えられるだろう⁵。

目的語名詞には、実際にどのような意味的制約が課せられているかについて、今後さらに検討される必要はあるが、いずれせによ軽動詞構文で、対応する単純動詞文にはない制約・制限が生じていることは確かである。

2.3 不定冠詞付き単数形名詞への偏り

軽動詞構文において、目的語名詞には基本的に不定冠詞がつかなければならない。

⁵ 関連して、Wierzbicka (1982: 771) では have a bite、have a chew のような表現について、物をかじったり、噛み砕いたりすることは無視できるような変化とみなせる (this change [involved by biting or chewing] can be dismissed as negligible) と述べている。

とくに、ゼロ派生 (zero derivation) あるいは転換 (conversion) と呼ばれる形態論的操作で派生される名詞は、この傾向が強い。例えば、Dixon (2005: 463) が指摘するように、ゼロ派生名詞である look は、軽動詞構文において定冠詞と共起できない。

(6) a. I {had / took} a look in the suitcase.

b. *I {had / took} the look in the suitcase. (Dixon 2005: 463)

複数形に関しても同様で、Live (1974: 40) は、He took {a look / a plunge / a pledge} に対して He took {looks / plunges / pledges} がほぼ容認されないと指摘している。

Wierzbicka (1982: 759-760) によると、名詞に先行する不定冠詞が、動詞が表す出来事を有界化かつ単数化する効果 (a delimiting and sigularizing effect) をもたらすと指摘する。つまり、不定冠詞によって、有界的でまとまりのある、繰り返し可能な行為として解釈することが構文的に要求されるということである。

しかし、この不定冠詞付き単数形名詞への偏りも、全ての名詞に厳格に課される特徴ではなく、ゼロ派生名詞に多く見られる一般的傾向に過ぎない。以下のように、接辞付き派生名詞では無冠詞や定冠詞の事例が観察される。

(7) a. We took exception to his remarks. (相沢 1999: 84)

b. ... but he was actually fourteen years younger and *made the discovery* of natural selection twenty years later than Darwin. (COCA, 2015 MAG)

また、Jespersen (1942) や相沢 (1999) が列挙しているように、ゼロ派生名詞であっても、無冠詞や定冠詞の例が見られる (以下の一部には、無冠詞複数形の例も含まれる)。

(8) a. give someone the chuck, give each other the cut, give someone the slip, {give / get} the

push, have the pull of, {have / get} the bulge on, put someone to the blush

(Jespersen 1942: 118)

b. take alarm, take notice, take offense, take root, have control, have doubt, have respect, have regrets, give advice, give chase, give help, make contact, make haste, make

ここで重要な情報を 2 点補足しておきたい。まず、ゼロ派生名詞と接辞付き派生名詞の違いに関して。相沢 (1999: 22) は、ゼロ派生名詞は基体動詞の意味に近く、身体動作などを表す日常的語彙として口語的文体が多いとし、軽動詞 **give, have, take** との結合が多いと指摘する。これに対して、接辞付き派生名詞はラテン語系の語が多く、抽象概念、出来事、行為の結果生じたものなどを指す。これらは、軽動詞 **make** との結合が多く、意味内容から学術書、説明文などで使われると指摘している。ゼロ派生名詞と接辞付き派生名詞の構文的特徴の違いは、2.5 節で見る「統語的固定性」とも連動している。

2 点目として、Wierzbicka (1982) や Dixon (1991/2005) は「軽動詞構文」のカテゴリに接辞付き派生名詞の例や無冠詞・定冠詞の例を含めておらず、軽動詞構文を「**have / take / give a (V)** 構文」として限定的に捉えている。このように考察対象を限定することは、多様なデータを観察しやすくするという理由から、研究手法の一つとして有効であろう。しかし、(7) や (8) も名詞 (の基体動詞) の意味が文の解釈に深く関わっており、動詞と目的語名詞の意味合成という観点からすると、これらの名詞の例も軽動詞構文に含めるべきだと筆者は考える。

2.4 アスペクト特性

Wierzbicka (1982: 757-758) によると、軽動詞構文と単純動詞文が大きな異なる点の 1 つとして、アスペクトに関する違いがあるという。軽動詞構文が表す出来事は有界的、すなわち時間的に限りのある出来事であり、比較的短めの時間幅で展開すると想定される。例えば、10 時間泳ぐ場合に **have a swim** とは言いにくいだろうと Wierzbicka (1982: 757) は述べている。また、(9) の **long** があることで長時間の行為を表すことになり、容認されないとしている。

(9) * He had {a long swim in his tiny pool / a long walk in his 10-by-12 cell}.

(Wierzbicka 1982:757)

Norvig and Lakoff (1987: 204) でも **take a stare** を例に、それが容認されないのは、軽動

詞構文が到達事象を語彙的に表すためであると述べている。同様に、Bruening (2016) も、(10) の *He gave a scream.* は限定された、比較的短い出来事を表すのに対し、*He screamed.* では制限なく続く（非有界的な）出来事として解釈されると述べている。

(10) *He gave a scream. / He screamed.* (Bruening 2016: 54)

このアスペクト的な意味に関連して、Kearns (1988/2002) および Martínez Caro and Arús-Hita (2020) によると、軽動詞構文は表す行為を最小化、矮小化するという、ヘッジ表現 (hedge) としての機能をもつという。以下の例では、軽動詞構文が太字で示した他のヘッジ表現とともに用いられることで、話し手の要求を和らげる効果をもたらしている (Martínez Caro and Arús-Hita 2020: 300)。

(11) a. [...] *could you **just** give me a ring and say it's done [...]*
b. *you ought to give it **a little bit of** thought before you actually put the thing ...*
(Martínez Caro and Arús-Hita 2020: 300)

ヘッジ表現としての効果は、出来事に有界性をもたらし、一定の短期間（短時間）継続する解釈とする軽動詞構文の文法的機能と深く関係していると考えられる。

ただし、上で見たようなアスペクト的な意味の特徴が、軽動詞構文においてどの程度、どの表現に当てはまるかについては、検証が必要であろう。というのも、(12) のように長時間を表す *long* が使われる例が実際には観察されること、また、Brugman (2001: 566) において *take a good long look* が容認可能であると述べられており、軽動詞構文が必ずしも「時間的に限りのある、比較的短めの時間幅で展開する出来事」を表すとは限らないことが分かる。

(12) *Again I raised the glass [...] and **had a long look** at the animal.*
(James W. Schultz, *Why Gone Those Times?: Blackfoot Tales*, 強調は筆者)

2.5 統語的固定性

Dixon (1991/2005) は、軽動詞構文が受動化できないと述べ、軽動詞用法と本動詞用法には明確な違いがあると主張している。

(13) a. * A swim (in the pool) was had/taken.

b. * A push was given Mary.

(Dixon 2005: 468)

一方で、Live (1974: 37-38) では、他動性の低い have を除いて、take, give, make などの軽動詞は、ほとんどの接辞付き派生名詞とで受動化可能だとしている。また、ゼロ派生名詞についても、基体動詞が自動詞のものは受動化しにくいとして Dixon の指摘と合致するが、さらに基体動詞が他動詞のものは受動化するものが多いと述べている。

相沢 (1999: 183-190) は、Live (1974) のこの主張に反例があることを指摘した上で、受動化しやすい名詞として、「身体動作以外のもの」を指す場合だと主張する。確かに、(13) の Dixon が挙げる容認されない例は身体動作に該当しているし、様々な文献で受動化が非文となる証拠として出される例も、身体動作を表す目的語名詞が多いように見受けられる。さらに、相沢 (1999: 187) は独自に収集した資料において、軽動詞構文が受動態で用いられている例の割合を挙げており、make (134 例、77%)、give (31 例、18%)、take (8 例、5%)、have (0 例) というデータを示している。そして、make の受動化の例が最も多いのは、make と共起する目的語名詞は、身体動作以外の抽象的な出来事・概念を表すものが多いこと、さらに make が用いられやすい学術論文では、能動文の主語を明示することを避け、受動態が好まれる傾向にあることも要因として挙げている。

Kearns (1988/2002: 2-3) では、以下の統語的な診断テストに基づいて、軽動詞が統語的な操作の適用を受けない「真性軽動詞」(True Light Verb) とそれが可能な「擬似軽動詞」(Vague Action Verbs) に分けられると分析する。

(14) a. 受動化：

* A groan was given by the man on the right.

A demonstration of the new equipment will be given on Monday.

b. WH 移動：

* Which groan did John give the rope?

Which explanation did the second witness give for the delay?

c. 代名詞化 :

?? The deceased gave a groan at around midnight, and gave another one just after two.

If you can give a presentation after lunch, I'll give {one/mine} after yours.

d. 定性制限 :

* Who gave the groan just now?

The representative who gave the demonstration left his card.

(Kearns 1988/2002: 2-3)

(14) の対比が示すように、同じ動詞 *give* であっても、後続する目的語名詞によって統語的振る舞いが異なることが分かる。特に、2.3 節で触れた名詞の定性による容認性の違いが、(14d) における真性軽動詞と擬似軽動詞の違いとして示されている点は興味深い。

さらに日高 (2007, 2023) では、*give a shout* を例に、*a shout* の解釈が出来事 (15a) か、産物 (15b) かによっても、その統語的振る舞いが異なると指摘している。

(15) a. A sudden shout was given by John.

* Which sudden shout did John give?

? John gave a sudden shout, and Mary gave one, too.

* John gave the sudden shout.

b A loud shout was given by John.

Which loud shout did John give?

John gave a loud shout, and Mary gave a louder one.

John gave that loud shout.

(日高 2023: 239)

ただし、日高 (2007, 2023) は、個人あるいは個人の中でも、これらの文の容認性判断にゆれが生じることを認めている (相沢 1999: 189-190 にも同様の指摘がある)。

以上、軽動詞構文における目的語名詞の統語的固定性は、次のようにまとめられる。

まず、(14) のような統語的振る舞いの差異は、軽動詞構文に二つの下位構文を認める根拠とみなすことができる。また、ゼロ派生名詞と派生名詞、および各軽動詞間でも統語的振る舞いの傾向に差が存在することも、異なる構文を仮定することを支持する。しかし、こうした統語的固定性は、語彙によって、また (15) のように解釈によっても、そして話者によっても容認性判断に揺れがあり、従って、絶対的な診断基準として信頼することは難しいと言わざるを得ない。

2.6 目的語名詞の動詞性

軽動詞の目的語として生起する名詞は、上述の通り、動詞からのゼロ派生のものと接辞付加したものに分かれる。また、両者は受動化できるかどうかなど、文の構造や他動性に関しても異なる特徴をもつ傾向にある。特にゼロ派生名詞を目的語とするものは、他動性が低く、統語的に固定した特徴を持つことを見た。

これはいわば、軽動詞と名詞が一つの複雑述語 (*complex predicate*) として分かち難いほどに密接に結びついていることの証左と考えることができる。この場合、目的語名詞は、複雑述語の一つの要素としては基体動詞の特徴を色濃く受け継いでいることが窺える。例えば、次の *think*、*choose*、*carry* は、軽動詞構文でしか存在しないゼロ派生名詞とされる (Kilby 1984: 117, Wierzbicka 1982: 755 fn. 3, Dixon 2005: 465)。

- (16) a. I'll have a think about it. (Kilby 1984: 117)
b. I want you to have a choose. (Wierzbicka 1982: 755)
c. John gave the baby a carry. (Dixon 2005: 465)

別の言い方をすれば、軽動詞構文は、動詞用法しかない語を例外的（あるいは臨時的）に名詞として使い、一種の複雑述語を形成する構文と特徴づけられる⁶。

目的語名詞がより動詞的であることを示す第二の証拠は、目的語名詞の発音が動詞と同じものがあるという Wierzbicka (1982: 792, fn.3) による観察である。May I have a

⁶ これとは異なるケースであるが、相沢 (1999: 24) は、ゼロ派生名詞も接辞付き派生名詞も、軽動詞構文での意味が、元の基体動詞と関連していても実際は異なる場合があると指摘している。例えば、*have a rage for* 「夢中になる」の名詞 *rage* は、動詞 *rage* 「激怒する」と全く意味が異なる。*take pelasure in* 「楽しむ」の *pleasure* も、基体動詞 *please* の「楽しませる」とは意味的に一致しない。これも、軽動詞と派生名詞が一つの複雑述語として密接に結びついている証左と見なせるかもしれない。

use of your pen for a moment? という文において、use は名詞としての /ju:s/ ではなく、動詞と同じ /ju:z/ であるという。

さらに、第三の証拠として、目的語の名詞を修飾する形容詞が基体動詞を修飾する副詞に意味的に対応するという点である。

(17) a. I had a brief sit-down. = I sat down briefly.

b. I had a long walk. = I walked for a long distance/ for a long while.

(Dixon 2005: 464, 一部改変)

ただし、Dixon (2005: 465) が触れているように、have a quick whiskey (= drink whiskey quickly) のような典型的な名詞を修飾する形容詞も副詞的に解釈できる。形容詞修飾と副詞修飾との意味的な対応関係が、目的語の動詞性の高さを示す証拠とは必ずしも言えない可能性がある（4 節の議論も参照）。それでも、have と a quick whiskey が意味的に密接な結びつきをもつことが示唆される⁷。

3 目的語名詞の意味タイプと軽動詞の意味

次に、英語の軽動詞構文がどのような意味を表し得るのか、特に、軽動詞と共起する目的語名詞の意味タイプを先行研究の成果に基づいて検討する。先行研究で構文的意味を考察する場合に多いのが、have、take、give、make など何か特定の動詞を取り上げて、それがどのような意味の名詞と共起するのかを記述するものである。

例えば、Wierzbicka (1982) は、動詞 have が生起する軽動詞構文を取り上げて「have a V 構文」と呼び、それが表す意味について詳細に検討している。考察では have a V 構文が have のスキーマ的意味を共有しながら、(18) のように 10 の意味に分類できることを指摘している。(18) ではそれぞれの意味とともに容認可能な例と容認不可能な例を引用する（太字による強調は筆者による）。なお、容認不可能な表現には Wierzbicka (1982) の文例を一部改変し、語句の形で抜き出したものが含まれる。

(18) a. AIMLESS OBJECTLESS INDIVIDUAL **ACTIVITY** WHICH COULD CAUSE ONE

⁷ Dixon (2005: 465) は、have a quick whiskey を have a quick drink との混成 (blend) と述べており、軽動詞構文も同様に特別な結びつきを示す構文と捉えているようである。

TO FEEL GOOD:

have {a walk / a swim / a run / a jog / a lie-down}

(cf. **have {a get-up / a turn-around}*)

(Wierzbicka 1982: 762)

- b. ACTION AIMING AT **PERCEPTION** WHICH COULD CAUSE ONE TO KNOW SOMETHING AND WHICH WOULD NOT CAUSE ONE TO FEEL BAD IF IT DIDN'T

have {a look (at) / a listen (to) / a smell (of) / a feel (of) / a taste (of)}

(cf. **have {a watch of someting / an observe of something / an inspect of something}*)

(Wierzbicka 1982: 763-764)

- c. TENTATIVE ACTION WHICH COULD CAUSE ONE TO **COME TO KNOW SOMETHING** AND WHICH WOULD NOT CAUSE ONE TO FEEL BAD IF IT DIDN'T

have {a try / a look (for) / a think (about)}

(cf. **have {an attempt / a succeed / a find of something / a decide}*)

(Wierzbicka 1982: 766-768)

- d. **SEMI-VOLUNTARY ACTION** WHICH COULD CAUSE ONE TO FEEL BETTER

have {a cough / a yawn / a cry / a vomit}

(Wierzbicka 1982: 769)

- e. **CONSUMPTION OF SMALL PARTS OF OBJECTS** WHICH COULD CAUSE ONE TO FEEL PLEASURE

have {a bite / a lick / a such / a chew / a nibble}

(cf. **have {a dust of the furniture / a trim of the bushes / a scratch of the ground}*)

(Wierzbicka 1982: 771)

- f. **CONSUMPTION OF NON-DISCRETE SUBSTANCES** WHICH COULD CAUSE ONE TO FEEL PLEASURE

have {a drink of (orange juice) / a somke / a drag (from) / a puff / a sip of (wine) / a sniff of (petrol)}

(Wierzbicka 1982: 774-775)

- g. **ACTIVITY SUPERFICIALLY INVOLVING ANOTHER ENTITY**, WHICH COULD CAUSE ONE TO FEEL PLEASURE⁸

⁸ Wierzbicka (1982) は、このタイプの *have a V* 構文が、主にオーストラリア英語（と一部のイギリス英語）にのみ見られ、アメリカ英語の母語話者に許容されるのは稀であると指摘する：

have {a kick of the football / a throw of the boomerang / a read}

(cf. **have {a kill of the chicken(s) / a break of the window(s) / a torture of the prisoners / a draw of a horse / a build of a house / a sing of that song}*)

(Wierzbicka 1982: 777-778)

h. **SELF-DIRECTED ACTION WHICH COULD CAUSE ONE TO LOOK BETTER**

have {a wash / a shave}

(cf. **have {a dry / a quick powder / a quick make-up / a quick dress / a quick undress / a face-wash / a face-shave}*)

(Wierzbicka 1982: 779)

i. **JOINT BODILY ACTIVITY WHICH COULD CAUSE THE PEOPLE INVOLVED TO FEEL PLEASURE**

have {a kiss / a cuddle / a hug / a dance}

(cf. **have {a stroke / a quick powder / a quick make-up / a quick dress / a quick undress / a face-wash / a face-shave}*)

(Wierzbicka 1982: 779)

j. **JOINT SPEECH ACTIVITY WHICH COULD CAUSE THE PEOPLE INVOLVED TO FEEL PLEASURE**

have {a chat / a gossip / a laugh / a bitch / a grab / a yarn}

(cf. **have {a discuss / a converse / a consult / a thank / a greets / an interview}*)

(Wierzbicka 1982: 786)

Wierzbicka (1982) のこのような記述を見ると、目的語名詞は状態変化事象を表さず、繰り返し可能な行為を表すこと、特に、主語が表す主体が心地よさを感じるような行為を表すという 2 節で見た構文的特徴の傾向が読み取れる。

(18) の構文的意味は、*have a V* 構文に生起する目的語名詞に見られる意味の傾向を捉えたものと見ることができる。例えば、(18b) の名詞は知覚動詞を基体とするもの、(18h) では *wash* や *shave* などの身繕い動詞 (*grooming verb*) を基体とするものと一般化できる。ここに挙げられた各意味は、大なり小なり相互に関連してはいるものの、全てに共通する意味要素を挙げることは難しい。このことは、*have a V* 構文が家族的

This subtype of the *have a V* construction is restricted to a few dialects of English. It is rarely, if ever, allowed by native speakers of American English; but it is widely used in Australian English, and also well-attested in (some varieties of) British English, and therefore deserves to be described.
(Wierzbicka 1982: 777)

類似性 (family resemblance) を有する構文ネットワークを成していることを示唆する。

さて、このような構文記述を俯瞰して見た時、1つの疑問が生じる。それは、(18) のような意味的特徴がこの動詞だけに特有の特徴なのか、他の動詞にも共通する軽動詞構文全体に見られる特徴なのかという点である。この疑問への答えは、**have** とそれ以外の軽動詞とで、共起する目的語名詞のタイプを比較さえすれば、自ずと明らかになるだろう。このような観点から軽動詞の比較を行った重要な研究として、Live (1973), Akimoto (1989), 相沢 (1999) が挙げられる。以下では、相沢 (1999) の研究成果を中心に検討する。

相沢 (1999) は、**have, take, give, make** を中心に、様々な軽動詞がどのような名詞を目的語にとるのかについて、詳細に検討している。以下ではその概要をまとめる。相沢 (1999) で与えられている名詞の意味特徴と、名詞の具体例の一部を抜粋し、(I) から順に列挙する。なお、「その他」に分類されるものについては、列挙された項目とその内容を踏まえて、分類の名称に一部変更を加えている。

◆**have** と結びつく名詞

(I) 自分の身体動作 (例 : **laugh, smoke, swallow, bite, look, peek, bath, smell, sniff, run, walk**)

(19) We had a good *laugh* together. (相沢 1999: 60)

(II) ことばによる相互活動 (例 : **chat, debate, talk, argument, comment, discussion, joke**)

(20) I wonder if you would mind if we had a little private *chat* with our Cathie. (相沢 1999: 63)

(III) 知的状態・感情 (例 : **doubt, fear, hold, belief, conception, grasp, understanding, guess, love, liking, admiration, dislike, hatred, resentment**)

(21) He had a firm *hold* on me through knowledge of my identity. (相沢 1999: 64)

(IV) 自分の意思表示 (例 : **intention, thought, objection, fight, quarrel, regrets, try**)

(22) Helen had no *desire* for that kind of life. (相沢 1999: 65)

(V) その他

(23) a. 経験 : I had *success* in trading. (相沢 1999: 66)

- b. 無意志的事態⁹ : The car had a *breakdown*. (相沢 1999: 67)
- c. 受動的意味 : We had a visit from our aunt. (= Our aunt visited us.) (相沢 1999: 67)

◆take と結びつく名詞

(I) 身体動作 (例 : ride, step, puff, swallow, pull, stumble ; ほか have と共通の名詞)

- (24) Bob let me take a *puff* of his cigarette. (相沢 1999: 80)

(II) 意志的行為 (例 : action, aim, care of, command, notice, turn, shelter, risk, vow, recess)

- (25) He should take legal *action* against them. (相沢 1999: 82)

(III) その他

- (26) a. 自然発生的変化 (例 : curve, hold, shape, root, liking, precedence)

The car took a sharp curve to the right. (相沢 1999: 83)

- b. 受動的意味 (例 : alarm, blame, offense, punishment, warning, delivery, fright)

take delivery of, take fright (相沢 1999: 84)

◆give₁ (二重他動詞用法) と結びつく名詞

(I) 他者へ働きかける身体動作 (接触行為)

- (27) a. 身体接触 (例 : embrace, hug, squeeze, kiss, handshake, touch, clap, chuck, stroke)

She gave the door another *push*. (相沢 1999: 51)

- b. (打撃的) 身体接触 (例 : slap, smack, punch, thump, kick, beating, whack, lash)

He gave me a *slap* on the back and said "Good job!" (Merriam Webster's)

- c. 物の形状変化 (例 : bite, sting, press, stir, stretch, twist, wring)

He gave my wrist a violent *twist*. (『新編英和活用大辞典』)

- d. 物の位置変化 (例 : heave, push, shove, thrust, screw, shuffle, spin, turn, flip, toss)

I gave him a hard *push*. (『新編英和活用大辞典』)

- e. 表面操作 (きれいにする) (例 : bath, shave, clean, sweep, polish, rub, wipe, wash)

⁹ 相沢 (1999: 67) では「無生物主語」という名称が付けられているグループである。ここでは出来事に関する特徴に基づいて「無意志的事態」とした。(23) の例は、主体がいずれも行為の受け手、事態の受影者 (affected) となることで共通している。

I gave the table a quick wipe. (Merriam Webster's)

f. 視線移動 (例 : glance, glare, look, stare, wink, nod, smile, wave)

He gave me a sharp look with his flashing eyes. (『新編英和活用大辞典』)

(II) 他者への感情の伝達 (例 : fright, satisfaction, relief, surprise, shock, trouble, pleasure)

(28) The medicine will soon give you *relief* from pain. (相沢 1999: 54)

(III) 他者への情報伝達、知的行為 (例 : talk, reply, instruction, warning, proof, think, thought)

(29) I gave the whole situation a big *think* for about two seconds. (相沢 1999: 56)

(IV) (他者への) 意志伝達 (例 : encouragement, reassurance, miss, refusal, try, assent, help)

(30) She gave (us) a flat *denial* to the rumour. (相沢 1999: 59)

◆give₂ (単純他動詞用法) と結びつく名詞

(I) 生物による音などの放出 (例 : gasp, cry, sigh, snarl, yell, mumble, bark, grin, bark)

(31) She gave a little involuntary *gasp*. (相沢 1999: 45)

(II) 生物による身体動作、表情 (例 : bow, nod, shake, beat, scratch, frown, smile, shudder)

(32) 'Yes' I said eventually and gave a *nod*. (相沢 1999: 46)

(III) 無生物による音・光・動きなどの発生 (例 : smell, glow, crack, jolt)

(33) The moss gives (off / out) a silvery *glow*. (相沢 1999: 46)

◆make と結びつく名詞

(I) (身体) 動作

(34) a. 出現・退去 (例 : exit, entrance, escape, approach, stop, sail, move)

I made my *exit* as discreetly as possible. (相沢 1999: 69)

b. 攻撃 (例 : stab, arrest, attack, descent, swoop, grab, snatch)

One could make a *stab* at Greg's back. (相沢 1999: 70)

c. 急激な動作 (例 : move, rush, dash, splash, leap, haste, spurt, dive)

Tom's aunt made a *move* to the front door. (相沢 1999: 71)

d. その他の動作 (例 : detour, flight, tour, call, visit, bow, catch, reach, ascent, descent)

He has made three *flights* into space. (『新編英和活用大辞典』)

(II) 知的活動など (例 : discovery, mistake, summary, prediction, guess, review, estimate, error)

(35) We can only make *guesses* about it on the basis of samples of performance.

(相沢 1999: 72)

(III) (ことばによる) 伝達活動 (例 : remark, statement, suggestion, excuse, call, show, display)

(36) Mr. Clinton made a live *statement* on CNN. (相沢 1999: 73)

(IV) 意志行為

(37) a. 自分の意志行為 (例 : attempt, resolve, bet, achievement, success, appeal, denial)

Recently, successful *attempts* have been made to unify three of the four categories of force.

(相沢 1999: 75)

b. 他者に対する意志行為 (例 : appeal, claim, request, demand, attack, charge, denial)

Greg made no *objection* to being taken home and left. (相沢 1999: 74)

(V) 関係表示など (例 : improvements, progress, recovery, alternation, comparison) ¹⁰

(38) I never expected Nikki to make such good *progress*. (相沢 1999: 77)

以上のように、相沢 (1999) は、have, take, give, make の 4 つの軽動詞それぞれと結びつく名詞を意味的に分類したうえで、詳細に記述している。また、相沢 (1999: 87) では、結びつく名詞の意味タイプについて、4 つの軽動詞を比較した表を挙げている (該当する項目には代表的な名詞が挙げられている)。上記の記述に合わせて一部表記を変更したものを、表 1 として挙げる。

¹⁰ 相沢 (1999) で「関係表示」とされる名詞類だが、comparison, improvement など、異なる状態の関係性や比較が関わる概念を表す名詞が多い。しかし、それ以外にも payment, deposit などの名詞もこの分類に含められており、かなり雑多なグループであるという印象を受ける。

名詞が表す意味内容	<i>have</i>	<i>take</i>	<i>give</i> ₁	<i>give</i> ₂	<i>make</i>
口頭行為	cough	—	—	cry	—
身体 動作（自身）	walk	stroll	—	nod	rush
動作 動作（他者へ）	—	punch	kick	—	stab
動作 飲食	drink	gulp	—	—	—
感覚	taste	sniff	look	smell	—
知的活動、状態	belief	—	—	—	search
情報 自身・相互	debate	—	—	—	remark
伝達 他者へ	—	—	advice	—	answer
感情 自身の	fear	—	—	—	—
感情 他者へ	—	—	offense	—	—
意志 自身	hope	care	help	—	attempt
意志 他者へ	—	—	—	—	offer
関係	—	—	—	—	advance

表 1 各動詞と結びつく名詞の意味内容（相沢 1999: 87-88, 表記を一部変更）

4 英語軽動詞構文への動詞中心的アプローチとその問題点

英語の軽動詞構文に関して様々な観点から研究が積み重ねられてきたが、これまでの先行研究の特徴として、動詞を中心に考察が行われているという点で挙げられる。上で見た Wierzbicka (1982) や Dixon (1991/2005) の考察でも明らかなように、*have* や *give*, *take* といった特定の動詞を取り上げ、それらと共に起しうる名詞の特徴や構文的特徴を考察するといった方法がこれまでの研究で大勢を占めている。このような研究手法・アプローチを、本稿では「動詞中心的アプローチ (Verb-centered approach)」と呼ぶことにする。

動詞中心的アプローチは、一見すると、軽動詞構文の役割が「軽い」という考え方と相反する立場のように思える。なぜなら、個別の動詞ごとに構文の特徴を記述していくことで、各軽動詞が構文においてどのような役割を果たすのか、その意味的な重要性を考えることになるからである。例えば、Wierzbicka (1982) では、軽動詞構文としての *have a V* 構文の多義を見事に体系的に記述しているが、そこで特定された 10 個の個別義は、目的語である *a V* の意味だけでなく、主体が何らかの繰り返し可能な行為を「経験する」(action seen as repeatable experiencer involving only one core participant) という動詞 *have* のもつ意味にも動機づけられるとしている (Wierzbicka 1982: 788-791)。つまり、(Wierzbicka 自身は *light verb* という名称を用いていないが)「軽動詞」という名に反して、動詞 *have* が構文全体の解釈に寄与していると述べていることになる。

これは必然的な帰結であると考えられる。ある特定の動詞を含む構文の特徴を記述し、最後に全ての特徴を俯瞰して見たとき、なぜその特徴がその特定の動詞を含む構文に存在するのかを考えれば、自ずと動詞の役割に目が向くだろうからである。実際、伝統文法の時代から、文の主動詞が何らかの役割を果たす記述も散見されるし、近年では、動詞の役割を強調する研究も数多く見られるようになっている。そこで、本節では軽動詞構文において動詞のもつ役割の重要性を主張する研究をいくつか概観し、動詞中心のアプローチについて検討したい。

4.1 軽動詞構文における動詞の意味の重要性

英語の軽動詞構文に関する近年の研究では、主動詞である軽動詞が、構文の事象構造と項構造の特性の決定に重要な役割を果たしていると明言する研究も少なくない (Butt 1995, 2010, Newman 1996, Brugman 2001, Folli et al. 2005, Wittenberg et al. 2014a, b, Bruening 2016)。特に、Bruening (2016) はいくつかの証拠に基づいて、軽動詞は本動詞と同じ語であり、また目的語名詞も一般的な名詞に過ぎないという主張を展開している。その根拠の 1 つが、Butt (2010) による類型論的調査において、軽動詞用法と本動詞用法とで形式的に異なる言語がないという事実である。軽動詞が本動詞と形式が変わらないのであれば、それは本動詞の用法の 1 つであると述べている (関連する指摘として、Huddleston and Pullum 2002: 291 も参照)。また、次の例の a pat、a kick のような出来事名詞は、目的語位置以外にも生起できることから、特殊な名詞などではなく、一般的な名詞に過ぎないと指摘する。

- (39) a. She gave him {a pat on the back / a kick in the teeth}. [light verb]
b. A pat on the back is better than a kick in the teeth. [non-light verb]
(Bruening 2016: 52)

(a) の軽動詞構文の例と同様、(b) のように pat、kick の出来事解釈がそれ以外の構文でも可能なことから、これらの名詞は軽動詞構文に特有の特殊な名詞なのではなく、一般的な名詞であると主張する。

軽動詞が本動詞の用法の 1 つとする 3 つ目の根拠として、対応する単純動詞文による言い換えが成立しない場合がある点が挙げられている。

(40) a. We took a well-earned rest.

* We rested well-earnedly. (Huddleston and Pullum 2002: 291)

b. He is taking another of his seemingly frequent showers.

* He is showering again seemingly frequently. (Bruening 2016: 53)

(40) は、名詞修飾の形容詞が、動詞修飾の副詞と意味的に対応せず、副詞の場合には非文となることを示している。また、Bruening (2016: 54) では、軽動詞構文において副詞修飾と形容詞修飾による複数の修飾要素が両立する場合、対応する単純動詞文では複数の修飾要素が両立しない例を示し、軽動詞と名詞が一つの複雑述語として一つの事象を表すのではないこと、すなわち、目的語名詞が表す事象が動詞の事象と異なるとしている。

(41) a. The man's wings slowly gave a quick flap.

* The man's wings slowly flapped quickly.

b. She deliberately put the accidental blame for the accident on Johnson.

* She deliberately accidentally blamed Johnson for the accident.

(Bruening: 2016: 54)

(41) の事実は、軽動詞構文と対応する単純動詞文が意味解釈上は近似するものの、実際には両者は異なる出来事を表すこと、すなわち、異なる事象構造を有することを示唆している。

(40)、(41) が指し示すのは、軽動詞構文では成立する意味解釈が、対応する単純動詞文では容認されないという点である。これに対して、2 節で観察した、完結的な事象解釈をもたらす修飾語句が生起できないという (4) や長時間の行為を表す事ができない (9) は、対応する単純動詞文で成立する意味解釈が、対応する軽動詞構文では非文となる例と言える。これらの事実から、Bruening (2016) などが主張するように、軽動詞構文と単純動詞文は異なる特徴をもつ別個の構文であると結論づけることができる。このことは、軽動詞構文が、構文特有の特性を有していることを示している。

軽動詞構文が構文特有の形式的・意味的特徴を有しているとする、それでは、述語である軽動詞はどのような意味的貢献を果たしていると言えるのだろうか。Brugman (2001) や Bruening (2016) に共通する主張は、軽動詞が文が表す出来事の骨組みとなる意味構造を

提供しているという点である。Bruening (2016) は、構文の項構造が目的語名詞ではなく、述語である軽動詞によって決まると述べる。例えば、同じ名詞であっても、動詞が異なれば異なる構文パターンをとる。

(42) a. * She gave a punch at him.

b. She gave him a punch.

(43) a. She took a punch at him.

b. * She took him a punch.

(Bruening 2016: 56)

(42b) は、一見すると動詞 *take* の項構造に反すると思われるかもしれない。なぜなら、*She took him a drink.*のように、*take* は二重目的語構文に生起できるからである。むしろ、(42b) の振る舞いは、(43) のような抽象的移動を表す場合の振る舞いと合致する。

(44) * She took him {a moment / the responsibility / dictation / a memo}.

(Bruening 2016: 56, 一部表記を変更)

つまり、*take a punch* は、*take* の多義的な用法の 1 つをベースとしており、この抽象的移動を表す *take* によって項構造が決まっていると Bruening (2016) は主張している。

他にも、Wittenberg et al. (2014a, b) は軽動詞と一般動詞は同じ統語構造をもつと考えており、Newman (1996) も軽動詞が意味役割を決めることを示している。Foli et al. (2005) は部分的にでも軽動詞がアスペクト特性を決めると述べている。

4.2 動詞中心的アプローチの課題

Jespersen (1942) に代表される伝統文法が軽動詞の意味の「軽さ」を前提としてきたのに対して、近年の動詞中心的アプローチは、軽動詞の意味の重要性を強調してきた。Bruening (2016) に至っては、軽動詞用法が本動詞用法と変わりがなく、全く同じものであるという論調を展開している。しかし、はたして本当にそう言い切ってしまうのだろうか。以下では、動詞中心的アプローチで見過ごされている課題を 2 つ指摘する。

1 つは、特殊な解釈が生じる場合である。既に、相沢 (1999) の (23c) の観察で、軽動詞構文が意味的に単純動詞の能動文ではなく、その受動文に対応することを見た。この受動の意味をもつ軽動詞構文の存在は、様々な先行研究で指摘されてきた (Brugman 2001: 568, Dixon 2005: 466-467, Bruening 2016: 57)。以下に (23c) を再掲し、類例を追加しておく。

- (45) a. We had a visit from our aunt. (= (23c))
 b. Jan took {a kick / a beating} from Robin. (Brugman 2001: 566)

他にも、(46) のように使役文に対応する意味を表す場合 (Cattell 1984: 77-78, Dixon 2005: 466, 植田 2021) や、さらには (47) のように相互行為文に対応する場合もある。

- (46) a. I gave Mary a lick of my lollipop. (Dixon 2005: 466)
 b. People stepped out of my way to give me my look at her. (植田 2021: 10)
 (47) a. Shapatish and I exchanged a smile. (COCA, 2016 FIC)
 b. Sharon and Larry, Jr. trade a look. (COCA, 2001 FIC)

(46) では、「飴を舐めさせてあげた」「彼女を見させてあげる」といった使役の意味、(47) では「お互いにお笑いあった」「見あった、視線を送りあった」とった相互行為の意味を表している。(45) から (47) の例は、前節までで見てきたような能動文に対応する意味とは異なる。なぜそのような意味を表せるのだろうか。

この問題の奥深さを示すさらなる例として、Brugman (2001) の挙げる次の対比が興味深い。

- (48) a. The bomber took a hit.
 b. The bomber took a reading.
 (Brugman 2001: 567)

(48a) では「爆撃機が攻撃を受けた」、(48b) では「爆撃機(の乗組員)が測定を行った」のように全く異なる意味を表す。Brugman (2001) によると、このように前者が受動的解釈、後者が能動的解釈しか許されず、逆は許されないという。これはなぜであろうか。この問いは、動詞中心のアプローチにとって問題となる。彼らが主張するように、もし本動詞の意味と軽動詞の意味と

が同じであるとすれば、(48) がなぜ異なる事態を表すのかが説明できないからである。さらに、Brugman (2001: 568) は、take a spill(こぼす)が take a dive と異なり非意図的な行為を表すことも、本動詞 take の意味からは予測できないだろうと述べている。

このように、同じ動詞が能動文以外に受動文、使役文、相互行為文としての解釈を許すだけでなく、後続の名詞によってその解釈が 1 つに決まるのである。これらの振る舞いは、軽動詞が本動詞用法の 1 つに過ぎないとする考え方に反するように思われる。なぜなら、軽動詞と本動詞が本当に同じものなら、複数の解釈が成立するはずだからである。だが、実際はそうではない。

動詞中心のアプローチのもう 1 つの課題として挙げられるのは、記述された様々な意味に関して、なぜその動詞が可能なのかという点である。これまでの研究では、例えばどういった目的語名詞と共起できるかについて、個別の動詞の意味、つまり各動詞の(抽象的な)意味によって説明が与えられる傾向にあった。しかし、相沢 (1999) をはじめとする軽動詞の比較を行った研究では、例えば have や take など、複数の軽動詞で同じような意味を表す場合があることが指摘されている。

また、Kogusuri (2024a) や小葉 (2025) では、a look を目的語とする動詞で文全体が look にあたる視覚行為を表す例、すなわち軽動詞用法として使われている場合を COCA を用いて調査し、動詞の意味に関していくつかのパターンが成り立つことを明らかにしている。例えば、「何かを見る」という能動的解釈となる動詞には、give 以外に fire や dart のような使役移動動詞や catch や grab のような獲得動詞が見られる。

- (49) a. “But he’s obviously the man you e-mailed.” *She fired a look* at Ashley.
(2012, FIC, COCA)
- b. “Don’t come closer!” The cop drew his gun anyway. *John darted a look* at the girl.
(2008, FIC, COCA)
- (50) a. Alice strained to *catch a look* at it ... (2019, FIC, COCA)
- b. Without ever doing anything as obvious as turning around to *grab a look*, he is constantly taking Draiken’s measure, calculating his distance, ... (2019, FIC, COCA)

どういった意味の動詞と共起すると文全体が目的語名詞の出来事として解釈されるのかという観点、すなわちどの動詞であれば「軽動詞性」を持ちうるのかと問いは、動

詞の意味的な「軽さ」という定義を破棄する代わりに、なぜある名詞に対してそのような意味の動詞が生起しうるのかを説明を試みることに繋がる。つまり、3 節で見た先行研究の成果に対して、「なぜそうなのか」を問いかけるアプローチとなる。これは、軽動詞を相対的に捉え、動詞の意味が名詞の意味とどのように協働して 1 つの出来事を描き出すのかということを探求することを目指すものである。このように個別の動詞の考察から、複数の動詞へと考察対象を広げることで、軽動詞構文がもつ構文的特性とは何であるのか、という本質的な問いに迫ることができると考えられる。

5 結論

以上、本稿では、英語の軽動詞構文に関する先行研究を外観し、その要点と課題を検討してきた。特に、これまで明らかにされてきた英語の軽動詞構文一般の構文的特徴をまとめた後、各軽動詞ごとの個別の構文的特徴を整理し、そして、これまでの研究が動詞中心のアプローチであったこと、およびその課題について述べた。課題の 1 つは、同じ動詞でも名詞によって文解釈が異なることが予測できないこと、もう 1 つは、ある動詞がなぜ特定の名詞と生起し、なぜ特定の解釈になるのかが説明できないことを指摘した。

これらの課題を解決するためには、Kogusuri (2024a) や小葉 (2025) のような特定の名詞と共起しうる動詞を考察するという「名詞中心のアプローチ (Noun-centered approach)」が重要であると考えられる。このアプローチの詳細については、別稿にて論じることにする。

参考文献

- Akimoto, Minoji (1989) *A study of verbo-nominal structures in English*. Tokyo: Shinozaki Shorin.
- 相沢佳子 (1999) 『英語基本動詞の豊かな世界—名詞との結合にみる意味の拡大』 東京: 開拓社.
- Bruening, Benjamin (2016) Light verbs are just regular verbs. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 22(1): 51-60.
- Brugman, Claudia (2001) Light verbs and polysemy. *Language Sciences* 23: 551-578.
- Butt, Miriam (1995) *The structure of complex predicates in Urdu*, Stanford : CSLI Publications.
- Butt, Miriam (2010) The light verb kungle: Still hacking away. In Mengistu Amberber, Brett Baker,

- and Mark Harvey (eds.) *Complex predicates in cross-linguistic perspectives on event structure*, 48-78, Cambridge : Cambridge University Press.
- Butt, Miriam and Aditi Lahiri (2013) Diachronic pertinacity of light verbs. *Lingua* 135: 7-29.
- Cattell, Ray (1984) *Composite predicates in English: Syntax and semantics* 17, Sydney/Orlando/Tokyo : Academic Press.
- Dixon, Robert M. W. (1991/2005) *A new approach to English grammar: On semantic principles*. Oxford: Oxford University Press.
- Folli, Raffaella, Heidi Harley, and Simin Karimi (2005) Determinants of event type in Persian complex predicates. *Lingua* 115(10): 1365–1401.
- 日高俊夫 (2007) 「「Give a ～」の意味構造と生成過程」『英米文学』51(2): 47-61, 関西学院大学英米文学会.
- 日高俊夫 (2023) 「英語の軽動詞関連形式における軽動詞性と構文性—give を主動詞とした文について—」岸本秀樹・臼杵岳・于一楽 (編)『構文形式と語彙情報』232–256, 東京: 開拓社.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge/New York: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto (1942) *A modern English grammar on historical principles, Part VI: Morphology*. London: George Allen and Unwin.
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論』東京: くろしお出版.
- Kearns, Kate (1988/2002) Light verbs in English. ms., MIT.
- Kilby, David (1984) *Descriptive syntax and the English verb*. London: Croom Helm.
- 岸本秀樹 (2001) 「二重目的語構文」影山太郎 (編)『動詞の意味と構文』127-153, 東京: 大修館書店.
- Kogusuri, Tetsuya (2024a) Can heavy verbs be light verbs?: A constructional approach to the transitive V ... *Look* construction. *Tsukuba English Studies* 42: 73-96.
- Kogusuri, Tetsuya (2024b) Taking a look at V (NP) *a look* constructions: A frame-constructional analysis. The paper read at 13th International Conference on Construction Grammar.
- 小葉哲哉 (2025) 「get a look の語彙意味論—give a look との比較を通して—」眞野美穂・江口清子・小葉哲哉・于一楽 (編)『レキシコン研究の広がりと深まり』, 大阪: 大阪大学出版.

- Live, Anna H. (1973) The *take-have* phrasal in English. *Linguistics* 108: 41–66.
- Martínez Caro, Elena and Jorge Arús-Hita (2020) *Give* as a light verb. *Functions of Language* 27(3): 280-306.
- Newman, John (1996) *GIVE: A cognitive linguistic study*. Berlin and New York: De Gruyter Mouton.
- Norvig, Peter and George Lakoff (1987) Taking: A study in lexical network theory. *BLS* 23, 195-206.
- Poutsma, Hendrik (1926) *A grammar of Late Modern English, part II, section II*, Noordhoff, Groningen.
- Stein, Gabriele (1991) The phrasal verb type ‘to have a look’ in modern English. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 29(1): 1-29.
- 植田正暢 (2021) 「感情表出の表情・行為を表す二重目的語構文—再帰代名詞を伴う *allow/permit* の事例研究」金澤俊吾・柳朋宏・大谷直輝（編）『語法と理論との接続をめざして—英語の通時的・共時的広がりから考える 17 の論考』3-21, 東京: ひつじ書房.
- Wierzbicka, Anna (1982) Why can you *have a drink* when you can’t **have an eat*? *Language* 58: 753-799.
- Wittenberg, Eva, Ray Jackendoff, Gina Kuperberg, Martin Paczynski, and Heike Wiese (2014a) The processing and representation of light verb constructions. In Asaf Bacharach, Isabelle Roy, and Linnaea Stockall (eds.) *Structuring the argument: multidisciplinary research on verb argument structure*, 60-80, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Wittenberg, Eva, Martin Paczynski, Heike Wiese, Ray Jackendoff, and Gina Kuperberg (2014b) The difference between “giving a rose” and “giving a kiss”: Sustained neural activity to the light verb construction. *Journal of Memory and Language* 73: 31-42.

コーパス・辞書

- Corpus of Contemporary American English [COCA] <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- 市川繁治郎（編）『新編 英和活用大辞典』東京: 研究社.
- Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary* (2008) MA.:Merriam-Webster.
- 南出康世（編）(2014) 『ジーニアス英和辞典第 5 版』東京: 大修館書店. [G⁵]

執筆者紹介（掲載順）

小葉哲哉（KOGUSURI, Tetsuya）

人文学研究科言語文化学専攻 言語認知科学講座

孫 聰雨（SUN, Tingyu）

人文学研究科言語文化学専攻 博士後期課程

王 鈺（WANG, Yu）

人文学研究科言語文化学専攻 博士後期課程

（2025 年 5 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2024

認知・機能言語学研究 X

2025 年 5 月 31 日 発行

編集発行者

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻